源氏物語

玉鬘

夾註

加藤磐斎

#18
932

月笠師著

源頭論

寒知書院

教行信証

化巻末

No.5223/23

第三源頭論標目

卷之上

一諸佛の最初は何ぞ佛なるや

阿彌陀如來は無始の覺體なりといはゝ十方衆生の本願もまた無始よりこれありや

一無始の本願ならは無始にもまた諸佛の淨土を觀見して選擇し玉ふへきやこれ如來すでに諸佛の本師ならはこの如來の正覺已前に何ぞ諸佛を云ぬことあるへきや

一この佛法爾は覺體ならは何ぞ因地の修行あるへきや若あらは無始の覺體とは許すへからす

一本有は覺體に何ぞ五劫の思惟あるや

一本有の覺體とりなし玉ふ修行なれは永劫の勤苦も實の苦惱よ
はあらさるへきや
一大悲を佛心とせは因位の修行を示さすとも何ろ果德の行を以て
衆生往生の願行を成就し玉ハさるや
一因を全して果なるときは因行即果行に非るへきや
一強て因果の相を分別するは何の要あるや
卷之中
一菩薩の度生ハ遊戯の如しとあれハ因位の修行も實には苦惱よ非
るへしや
一本有の果體より衆生を濟化し玉ふならハ實に遊戯の如くなるへ
し何そ度々よ因地に出て苦行し玉ふと云ふや

一如來回向の宿善よ由て信心を發すと云はゝ何そ一切の衆生一時
に發心せさるや
一機の罪根の淺深に由て信を發すよ遲速ありといはゝ宿善の本ハ
機の方の德よ非すや
一宿善ハ人々本具の正因佛性に非るへきや
一如來の性德即衆生の正因佛性なりと云ハゝ一分如來も迷の中に
在すへきや
一如來の性德變して無明をならハ成佛の已後もまた妄緣に由てハ
無明となるへきや
一佛性に本末ありと云ことは其理あるへからす
一諸佛ゝ教道も宿善とならハ宿善ハ必す彌陀他力ゝ本願にも限る

へからすや

巻之下

一衆生のいまた淨土に生せさる己前ハ唯阿彌陀如來一體のミ淨土ゑ在すへきや

一無始の法性の上には一二の佛の次第を論すへからさるや

一衆生本來成佛ならは何ろ彌陀を賴て淨土の往生願ふや

一本來夢と如くなる六道の苦也と知らは實ゑ佛の上には苦行あるましや

一此境界本來夢の如しと知らはすてにこれ悟ると云ものに非すや

一睡りて夢みるを傍ちりおこすに由て始て夢をさますを他力の回向に譬へは自ら夢と寤るは自力にてさとると云ぬ者に非すや

一法爾ゑ無明の淺深あらハ又法爾ゑ五性各別なるへきや

一無明の不同にて成佛に遲速あらは極遲の者ハ永不成佛と機に非るへきや

一一切衆生悉く成佛せは終には衆生界ハ盡きて佛界の一になるへしや

一衆生は法性ちり生する故ゑ盡ることなしといはゝ佛ハすてに一人さとりは一佛增すへしかくと如く增すときは實には佛の數は次第に多くなるましや然は何故衆生界も佛界も不增不減と云や

右二十八條

源頭論卷之上 一名拆疑立信論

問　阿彌陀如來ハ往昔世自在王佛の所にして發心し玉ひ五劫に思惟して四十八願を立て永劫に修行して衆生往生の行業を成就し其行滿足して十劫已前に始て正覺を唱へ西方に淨土を構へて十方來生の者を待請玉ふや然ハ其正覺未た成就し玉ハさる前ハ實業の凡夫にて在や若然らは其師の世自在王佛と申すも凡夫なるへしとれ則五十三佛の教を次第に承け傳て成佛し玉ふ故に然は五十三佛と云も亦本とは皆お凡夫なるへし各これ前佛の教に由て成佛し玉ふへきの故にかくの如く推し窮るときハその諸佛の最初として根本の師とおわり玉へる佛は何理にて自ら證を開きかくの如く佛法と云ふ道を教て廣く三世十方よ弘め玉ふやと此疑ある者を何か教へき

答　かやうの沙汰ハ源頭を討ると云ものなれは始識源頭行不到と世儒淺近の上にも尚苦しめる事なれハ況や出世佛境界の甚深不可思議なる何そ凡愚短少の識智を以て輒く擬議思量すへきことなら んや不思議の境を強て思議せんとする者は顚狂の病を發す亦是れ惡趣輪回の業縛なり故にの玉ふ衆生有碍のさとりなて无碍の佛智をうたゐへは曾婆羅頻多羅地獄にて多功衆苦にしつむなりと畢竟知見に知を立るは無明の本なり故に吉田の法師の天よりや降りけん地よりや湧けんやかゝるはまことよ殊勝の解なりたとひ何ほどの源底を知り盡すとも淨土に往生すへき堅固の信心なくは何の所詮のあらん必すこの道理を知り極めて往生すへしとあることには非す安養よいたりてさとるへしと示し玉へは淨土へ往生せハや

かて明らかまこと理をさとり知るへきなれは何故その遲からんことを憂とすへけんや然は只愚痴に返りて一向よ仰信して自身往生の覺悟を決定し偏に歡喜信樂の志を深くすへきとり外は皆な無益の論談なるへし

問　示諭の如きはまことよ然り然れとも衆機萬差なる故に一類の者ありて愁よ邪僻の才覺より此源頭よ於て聊よても其道理のかくもあるへきを思ひ定むる分もなきときハ彷彿としてこれか爲に信疑相半し佛祖莫大の恩德も若存若亡して骨髓に徹して有り難く思ふ心の發らさるを歎き悲むありおもふにそれ佛法を異端と廢棄して因果を撥無する族は本とり佛教を擧け用されハこの源頭の明めかたきを悲歎すへきよ非す然にこれを歎くハひとへに佛法の淵源

に徹底して信根を堅固におしえたき爲なれハ若その疑網を摧裂せは無上大信の人をもなるへし然るときハ此機ハ或ハ善惡交際の人をも云へき歟然ハこの機の爲よその惑を解くへき旨もありてろの泣をとゝめハ是則大悲善巧の一端ならん庶幾はかゝる愚迷の者の爲よ只事相淺近の道理を以てそれ幽玄深妙の趣を近く心得分くへきやうに諭すへき旨もあらは今我爲にこれを教へられは誠に永劫不朽の榮幸何事かこれよしかん

答　此談いかさま旨なきに非す然れとも無始の業障深き者ハ幾重よろの義を示すともあとを逐て疑端止みかたきものなれハかゝる機ハ縱使千佛身を遷ひ玉ふとも救へきに由なしと宗家も示し玉へは況や今時の吾人の同し无智不覺の身よして何そよくその惑を諭しゑて信根を堅固におさしむと云こをあらんやまこをにろの身宿緣深厚ならハ祖師のの玉ふか如く我れとして淨土へまひるへしとも又地獄へゆくへしとも定むへからす故聖人の仰よは源空かあらんところへゆかんと思ハるへしとたしかみ承りし上ハたとひ地獄なりとも故聖人のわるらせ玉ふところへまひるへしを思ふ也乃至たとひ彌陀の佛智ゑ歸して念佛するか地獄の業たるをいつはりて往生淨土の業因そと聖人の授々玉ふにすかされまひらせてとれ地獄よ墮つといふともさらにくやしを思ひあるへからすとゝく師教を大切に信する上は只ろ此教に任せて阿弥陀佛を賴て念佛すれは必す淨土へ生せさせ玉ふを深く信するとり外は別の之乎者也を料簡してこれを知らされは往生の信心堅固なりかたしと云こをハあ

るへからす然にこれ祖師ゟ御ねんころゝる御教化を日夜に承りゝから何の益ゝもゝらぬこの源頭をいかゝゝ心元ゝく思ふてこれか爲にその信を障らるゝと云ふハこの機はいまた宿善開發せぬ者と知られたり其无宿善の前にハいかほと諭し教ゆゝも爭てか眞信を發起すへきことあらんや但しかくハ思へゝもこの懷感禪師のことき尙念佛往生の一事に疑心晴すして三年志を專にして念佛し玉ふに由て終に靈瑞を感して始て深信を決定し玉ふこともあれは大疑の下ゝは必す大悟あるゝれハ今この疑難を解するに由てその信解を成せんも亦知るへからす然は何ゝ强ちにこれを不信の機ゝ定めて諭すに便りゝしとすへきや若この疑をさとさすしてそのゝまゝに捨ておかハゝの疑霧のいよ〳〵あつくゝりていつ晴るゝと云ふ期もあるましけれは偶受かたき人身を受値かたき佛法の中に特ゝ超世不共の大願に遇ひ奉りゝから此疑惑に滯て一大事の往生を仕損せんは寶の山に入て手を空しくするに過たることゝれハまこゝに哀れむへき義也然れともかくの如きの源頭の深遠ゝる沙汰は吾儻の无智ゝる身にていかてゝ佛ゝ眞教に相應すへきやうに示しさとすへき方を知らんや然らハゝの自ら明らめ得ぬこゝを兎角と擬議せんは實に冥眺の照覽も恐るへきことゝ也されとも若この示諭を聞て捨ゝ泣をとゝめ大悲の願海に深く歸入すへき緣とゝもゝらは虛に往て實ゝ還ると云ふ道理ゝも叶ふへきゝれハ今聊か我か會得する分を以てこれを談すへし先夫天地開闢して此世界の成するに就て有情非情森羅の万像歴然ゝして現ゝ見ることゝ也此万物に差別はあ

れとも畢竟してハ陰陽の二を以て建立する也故ゆこの陰陽有情ゆ在てハ氣となり血となり非情に於ては發生を陽としその質を陰とす然は一毛一葉及ひ頑石泥土の類まてもこの二を離れては成せす然にその陽のすかたと云はこれ火大に屬して明かに輕く昇る者也又陰のすかたと云はこれ水大ゆ屬して照し重く降る者也この陰と陽との性を相と個々物々ゆ具する中に至極の精粹と云ぬ者ありこれ天ハ日は極陽ハ精なる故ゆ火珠を以て對へハ火下るなり月ハ極陰の精なり故に水珠を以て向へハ水滴るなりかくの如く二耀は陰陽の極精なれとも尚これ相に顯れたる者也實ゆ陰陽の性を云ものハ法界に徧滿し互融して形色を以て見るへき物ゆ非す識智を以て測るへき物に非す故ゆ火の中に潤ひあり水の中に燥くことあり又金石相打は忽ちら火生し鬱蒸相薫すれハ濕自ら生すこの性は混沌未分の昔より法爾をして存する物也誰かこれを造爲して陽とし陰とする事あらんや然はこの陰陽の性理ハ無始本有の物なり本有の物なる故に今日に至りて法界ゆ周徧し時として斷絶することなし此本有の物體に付てハ是何なる道理にて陰たり陽たると分別をなすへきや唯不思議と信すへき外ハなかるへし然ハこれ不思議ゆてろの道理ハ會得せぬとて陰陽の德用を蒙らすとハ云ふへからす故にろの道理はこれ何にを云事を知ねとも火に着ハ熱く水を掬すれは冷なりこの世間現量の道理に於て誰か然らすと疑ふ者あらんやこの道理に疑あるましきならは佛法の正理を信せんは尤も易きと也其故ゑ總て一切の有情と云ふ物は必す慈心を具する也故に惻隱の

心ハ仁の端なりと云くたとひ人を殺し財を奪ふほとの惡人なれとも嬰兒の坑井に墜んとするを見ては急ゝ抱き留めたくも思ふ心ハ自然に備る也これを儒には性ハ善なりと云也又は人ハ仁也と訓して人心の本性は仁慈なる物と云へり但し人倫に局りて仁慈なる者と云は人は萬物の靈長なる故ゝ仁慈の相顯れ易きを以て偏ゝ人ハ仁也といふとも有情數の本性を推し窮むるときは惡趣に通して自然に慈心は具する也これ故に禽獸の子を憐み悲むをみるに彼の身命をも忘るゝほとにあるはこれ自然の慈愛なりこの傍生の上を以て推せは地獄餓鬼等の中にも本性にハ慈心あるへし只其極苦に逼惱する故ゝ慈相の顯るゝ緣なきれみこれに由れハ下も地獄より上ゝ佛界まて有情の本性は慈悲なる物と知らるゝ也然に同しくこれ

慈心を性とすと雖とも四惡趣は惡業に感すれハ多ハ理ゝ具して事ゝ顯れす人天は善果と雖とも尚これ有漏の妄境なる故に眞性の慈心ハ甚たはれなり二乘は一分無漏の眞智あれとも尚偏小れ故ゝこれを小悲と云ひ菩薩は稍眞性れ慈心自在なれとも佛に對すれは中悲と名く然に佛界に至ては無緣の慈悲を滿足して三乘の慈心に超過する故に大悲と稱する也こゝを以て一切有情の慈心の至極し精粹なる處は特佛界に止る也故に經には佛心者大慈悲是と說玉ひて佛と云ふ者ハ大慈悲の心をさすなりと然は諸佛として孰か大慈悲心ならぬハなしその中に至極大悲の精粹なるは阿弥陀如來なりその故ハ諸佛の大悲ハ苦ある者に於て心偏ゝ常沒の衆生を愍念し玉ふこゝを以て勸めて淨土に歸せしむとあれは先つ慈心と云ハ物の

苦惱を受て依怙なきを憐むをいふ也然ハ五趣六道の中より別して重苦の者を愍み智目行足なき四重五逆の罪人を偏に救はんと誓を發し玉へるハ唯阿弥陀如來一體に限れりこの佛を除て外にのゝる殊勝の大願を起し玉ふは一佛もなし然るときは諸佛の各々より具し玉へる大悲心の中に別しる至極究竟の大悲心を成就し玉へるハ唯これ阿彌陀如來なれは諸佛慈心の極精純粹なる處を以て此佛を諸佛の本師本佛と云ふことなりこの故に楞伽經には十方佛土の諸有法報應變化身の諸佛も皆阿彌陀如來の極樂界より出玉ふと說かれ般舟經にハ三世の諸佛は彌陀に三昧を念し玉ふに依て成等正覺し玉ふと說玉へりこゝを以て觀經より見無量壽佛者卽見十方無量諸佛と說玉ひて阿彌陀佛を見奉れは卽ち十方諸佛一同に見奉るとなりこれこの佛は諸佛の本師なる故より彌陀如來一體に上より諸佛の万德を滿足し玉ふを以て也故より巒公の讚偈ゟは彌陀の淨土に歸すれは卽ち諸佛の國より歸命す一心を以て一佛を唱れは十方の无碍人に遍すと天台の止觀には若彌陀を唱れハ卽こゝを十方佛の功德を唱るにひゝしたゝ專ら彌陀を以て法門の主をすとこれらの經釋に由れハ阿彌陀如來は實にこゝを三世十方の佛陀の本師にて在ゝ云こゝといよ〳〵明に知らるゝ也この故に莊嚴經より三世不遷の覺體よりして十劫已前に正覺を成し玉ふを說玉へりこれに依て讚文にも彌陀成佛のこのかたはいまゝ十劫とときたれと塵點久遠劫よりもひさしき佛とみへたまふ南無不可思議光佛饒王佛のみもとにて十方淨土のなかよりて本願選擇攝取するとの玉へは久成本有の不可思議光佛

にて在すとも一類の物機の爲にかりに法藏比丘となり玉ひて世自在王佛の所にしてこの大願を發し再成の正覺を唱へ西方の淨刹を構へて今時濁惡の凡愚を引接し玉ふ也これを果後の方便との玉ふ也これに由てその再成已來の時に約せは單に十劫と云ひ久成の本より一類の機緣に趣き玉ふに約せは赴機の十劫と云也故に宗家に於のたまはく既に窮理の聖と成て眞に偏空の威あり西方に小を示現するハ但是暫く機に隨ふと然はこれ世間の陰陽の万物に偏すれとも心の純極なる處阿弥陀如來と顯れ玉ふ也又たかの日月ハ陰陽の精粹の相に顯れたる物にしてこれ陰陽の性は本有の理なる故に十方に偏滿して增減なきが如く阿彌陀如來と云ふ報佛の相は諸佛有情の慈心の純極なる處に顯れ玉ふにてその自性法身の覺体ハ法界に周遍して唯有情數の慈性のみに非す一切万物に通してこれ佛性の滿玉はすと云ことなしこれに由れはこの陰陽の性も相も本ハみなこれ唯この如來の自内證の德用なり然れとも今しハらく世間に知るところの義を以てこの如來の本有なることを示さん爲めに先は陰陽の事相を別に擧てこれを喩るなり然らは世間に知るところの陰陽の理本有にして新造の物に非すと思ハゝこの如來も本有にして新成の佛に非らすと云ことを察すへしこれに就て又復世間所知の義を以て喩へハ陰陽の精粹日月とする故に日に對へハ火をとり月に向ふは水を得るが如く阿彌陀如來に歸向すれは即その佛の性をうくるなり故に信心によろこふ人ハ如來とひとし大信心ハ即是佛性

等との玉ふはこれなりこの故ゑ三世十方に諸佛と云ふも本はみな
この如來に歸向し玉ふに由てその佛性を得て成佛し玉ふ故にこれ
を弟子の諸佛ゑの玉ふことなり又或ハ直にこの如來の自内證より
分身して異佛の名を顯し玉ふもあるなる故ゑ久遠實成阿弥陀佛五
濁の凡愚をあハれみて釋迦牟尼佛ゑしめしてゑ迦耶城にハ應現す
るとの玉へりこれゑ由れハ釋尊ゑ云も即これ如來の内證智ゑ分
身し玉ふ者也故に密乘にては大日弥陀同體異名と云ふなりその大
日は即是毘盧遮那盧毘遮那は即是顯教の釋迦なれは顯密二教に通
して弥陀如來ゑり分身して釋迦大日ゑ現し玉ふと云ことは爭ふへ
からすこの故に華藏世界の本主と云ふも本ゑ一体の分身なる故に
何れゑ主とし伴とするも無碍にして妨なし然れとも極成する處は

此如來ゑ結歸すこれ其本体なるか故なりこれに由れは世自在王佛
と云ふもこの如來の分身或は弟子の佛にて在ゑへし若夫分身なら
は師質の差別を論すへからす唯是一類濟度に方便ゑ師質に相を現
し玉ふ也若又弟子ならハこれまた濟化の善權に師質の相を反して
示し玉ふなりこれなを義經の關所に難を脫れん爲に辨慶か僕從と
なりて杖にうたるゝか如し衆生の重苦を脫せしめん爲の大切の所
なる故にかりに師資の相を反顯し玉ふ也とくこと旨を領せは世自
在王佛も五十三佛も乃至蓮華藏界の微塵數不可說不可說の諸尊も
悉く阿彌陀如來の分身或ハ弟子ゑなる在すと知るへし然はこれ阿彌
陀如來ハ無始本有の第一佛なり故ゑ略論ゑ曰く若便無第二佛乃至
無阿僧祇恒沙諸佛者佛便不能度一切衆生以實能度一切衆生故則有

十方無量諸佛無量諸佛即是前佛所度衆生乃至後佛能猶是前佛之能何以故由前佛有後佛故譬如帝王之印得相紹襲後王即是前王之能故に
と知るべしかくの如く前後の佛あることを論するときは第一の佛
なくハあるへからず故にそれ第一佛とハ本有の阿彌陀如來なり本
有の如來なる故ゑ本有の佛法の理を本有と證ゑ玉ぬ也これに由て
佛法と云道ありて三世十方ゑ弘通し玉ぬことともまた無始本有と知
るへし無始本有と知るときハかの陰陽の本有にしてその由來いか
にと分別すへきやうなく唯不思議と信すへきより外なきか如くこ
の佛法の源頭は不思議の中の不思議なれハ何ぞ言議思量の及ふと
ころならんや故ゑの玉ふ五の不思議をとくなかに佛法不思議にし
くらなき佛法不思議をいふことは彌陀ぞ弘誓ゑなつけたりと然る

にこの不思議の源頭を知り得すハ往益いかゝと疑ふならハかの陰
陽の性理をもとくと測り得すハ其の德用をハ蒙るまじと云ハん歟
世の孩兒の如きは水火の名をたにも知らねど火ゑつけハ熱く水に
つけは冷なる覺知ハある也然はこの佛法本有の源頭を知ぬとて賴
めは助け玉ひ念すれは淨土に生ると云こと何の疑あらん然るとき
は唯不思議と仰信して佛祖善知識の教言に隨順をへきより外はな
しと思ふへき也

問　この如來すなハちこれ無始の覺体なりと云はゝ十方衆生の本
願もまた本有の誓約なりや但しこれ願は十劫再成のとき始て發し
玉へるや若然は十劫再成の已前は十方衆生の本願に酬ひ玉へる佛
には非さるへきや

答　南無不可思議光佛饒王佛のみもとまてとの玉ふにより不可思議光佛ハ寶積經に說玉へる阿彌陀如來の光德なり然はこれ再成已前よりすでに不可思議光佛にて在すときは即ち阿彌陀佛と申す佛也阿彌陀佛と申すときは無量壽無量光如來と申すと也無量壽無量光と申すハ壽命光明の大悲の願に酬ひ玉へる御名なれは再成已前とりするハち此大願酬報の佛体なりと知らるゝ也これに由れハ十方衆生の誓願も本有の誓約まて在すといふと明けし然まこれ本有の誓約なれとも我か如きの輩无始已來業障重厚にして値遇の因緣うすき故に再成正覺の善巧を設けて復さらま本有の誓約を十劫已前に唱へ顯して結緣濟度し玉ふ也これ猶釋尊の娑婆往來八千度ゞ示し玉ふか如しこゝを以て略論に曰く諸佛莫問有緣無緣何不盡度一切衆生者非理言也知るへし無邊の衆生なれは値佛の因緣親疎かきに非す故にその疎遠の衆生の爲まは幾度も濟化の結緣を設ゞ玉ふ故ま今此十劫再成の正覺ハ我等かためけ巧便にして本有久遠の誓約を重てこれを擧け示して近く知らしめ玉ふ者也これに由れは誠に今時の我等か輩はこの如來の大悲の恩德を重々度々に蒙り奉ると云ふ理深く感歎悲喜すへきことなり

問　この如來の四十八願は十劫成覺の以前二百一十億の佛土を觀見して中に於て善妙を攝取し麁惡を選捨して建立し玉ふなりと然に今示さるゝか如きは此願はこれ本有の誓約にして再成の時に重て近く示さるゝ也と若夫本有ならは本有はすてにこれ阿弥陀如來一佛の德にして十方の諸佛はうの本有の弥陀の内證より成就し玉

ふとあれはその本有の處よはいまた諸佛ありとは云へらす若本有に諸佛もあらは何ろ弥陀一佛を本有の覺體なる故よ諸佛の本師也と云ふことをえんやこれよ由て本有には他の佛なしと云はゝその本有の誓願ハ何れの佛土を見て選擇攝取し玉ふや若その本有の誓願ハ選擇に非して本有にこれありと云はゝ再成の本願と本有の誓約とは同しかるへからす若これ同しうらすといはゝ何そ再成の本願即是本有の誓約なりと云ふことをゆるすへ〻んや

答　二百一十億の佛土とは即これ華藏界なり華藏實はこれ微塵數不可説の佛土なれとも姑く十重二十重の大數に由て又これを別て委く數ふるときは大略二百一十億土なる也此華藏と云は即是本有の佛土也本有の土にして微塵數なるときは本有の佛も亦微塵數なりその微塵數の佛と云ハこれ則本有の彌陀ハ分身なり彌陀すてよ本有なる故に分身の諸佛もまた本有あり何に由てかうくの如く多の佛土をとかち多の分身を現し玉ふと云ふにこれまた本有に無邊の衆生有てその機の差別もまた本有よ不同なる故にその處所に隨ひその機類よ應して法要を示さゝれハ濟化の緣廣からさる故に多身を現し多刹を設け玉ふ也皆これ本有の彌陀の大悲の極成し玉ふ故也故にその華藏の中にハ純淨純染染淨雜居の品ある也今この娑婆染穢の土もかの第十三重の内よあるなり何んろかくの如く染淨の差別あるそおれハ衆生の業感無始より不同なるか故に各其業に隨て感せしめ玉ふ故なりこれ例せは極樂に九品ハ差別あるか如し但し佛の自證の德に約せは純染ハ土といへとも本有法性の國な

りこれを束て華藏と云おて又唯弥陀分身の諸佛のみに非す有情の中ゝ於ても无始本有に法爾の因緣有て無始時來此弥陀の開化に由て无始に成佛するもあるゝりこれを諸佛不思議の境界と云也この道理に由れは何て無始に諸佛及ひ諸佛の土ゝして云んや然にゝの土を云ハ既ゝ諸佛と成り玉ふときハ本有の覺性をさとる故に全く彌陀の自内證と一致にゝり玉ふ也こゝを以て諸佛もまた各々ゝ華藏界を莊嚴し玉ふ也これゝ由て不可說不可說の佛土ある也然ハこれ無始にかくの如く不可說の佛土あれはゝの中より本有の善妙を攝取して本有の麤惡を選捨し玉ひ別して一類眞信念佛の機に生すへき一種不可思議の報佛土を建立してこれを安養極樂と名付玉ふ也この道理に由れハ本有と再成と並ゝこれ選擇攝取の願ゝ由て建立し玉ふ淨土也と云こと豈怪むへけんや又復佛智所證の邊に約せハ念劫融即し十世一念に具すれハ本有と再成と無二無別ゝり凡夫生滅の智を以て測るへきゝ非すと知るへし然にかくの如く選擇の本願ゝ由て眞土を建立し玉ぬゆへは眞信念佛の機は彌陁本有の内證ゝ契ゝ故に即その彌陀の報身自體の安住し玉ふ眞善淨妙の土に生せしめんゝ爲也此故にかの安樂淨土は十方諸佛の刹土に超過するゝハちこれ彌陀の因願ゝり故に平等覺經に曰く令我爲世雄國土最第一其衆殊妙好道場踰諸刹國如泥洹界而无有等雙と宗家の曰く觀彼彌陀極樂界廣大寬平衆寶成四十八願莊嚴起超諸佛刹最爲精と然ゝ此の如きに報土と云も彼土に生し畢り彼佛の内證智をうれハ即ち法界に徧滿して悉く眞報土ゝり故ゝ究竟如虛空廣大無邊際と

の玉ぬ也これ其所生れ機の佛智よ託する故に圓滿無際なり若自力の修善を以て生する者は感機の化土なるか故に偏小局分あるへし

問　この如來はすでにこれ无始本有の覺体なりと云はゝ實よはしめのなき法爾の佛なり法爾の佛ならは因地の修證を論すへからす唯法爾として本有よ淨土を建立し玉ふなるへし若然はたとひ一類の爲に十劫再成の方便を示さるゝともまた因地の修證を論せすしゝ唯その佛土を十劫已前に建立し玉ふと說き玉ふへし然に十劫再成の以前よは永劫の修行をなして淨土を建立すとあれハ本有と再成との淨土の建立ハ同しかるへからす若然は何ゝ本有と再成と无二と无別を云ことをゑんやこれよ由て本有よもまた因地の修行あり也云ハゝこれゝの因修に由て果上の淨土を建立しその土の教主となり玉ふなれハ既にこれ成佛の因あれは无始也も本有とも云ふことを許すへからす但しこれもなを果後の方便也を云はゝ本有の實体よは實に因行なかるへき也若然らハいつまても本有と再成と也淨土の建立ハ同しからしを云ふへし

答　かくの如きの疑難はこれすなハち有碍のさとりにて無碍の佛智を測るを云者也知るへし如來實相不生不滅の境界は凡夫有相の生滅の識智を以て擬すへき者に非すこの故に此如來无始究竟の覺体の處に即ち无始本有の因行を修せらるゝ也然らはこの因果同時よして前後あることなしかやうの義は華嚴の十玄緣起門と云道理ふてこゝろうへし故にかの初門の同時具足相應門をいふを賢首大師解して曰く此上十義（一教義二理事三解行四因果五人法六分齊位七師弟法智八主伴依正九隨生根欲示現十逆順休用自在等）同時相應成（ソス）ニ一

緣起无有前後始終等別具足一切自在逆順參而不雜成緣起際此依海印三昧炳然同時顯現成矣又第三諸法相卽自在門曰良由此一乘圓極自在無碍法門得一得一切故耳因果俱齊無前後別故又第五微細相容安立門曰於一念中具足始終同時前後逆順等一切法門於一念中炳然同時齊頭顯現無不明了猶如束箭齊頭顯現耳然に此の如く同時にして又前後あり前後ありてしかも同時なり故よ第八十世隔法異成門曰此十世三世ニ各有二三世一即爲二九世一此九世必相即入故成二一總句一具足同異同時顯現成緣起故得卽入也とこれらの道理に準して知るへしこの如來無始本有より前因後果に次第ありて而も同時なり十劫再成の因果もすなはちまたかくの如し爾らは何ろ本有と再成と異なりと云はんや知るへしこれ凡夫生滅に分齊の前へよ習て後よ得ると云ふ如くなるに同しからさるこ

とを仍を更に淨教の法門に由てこの義を辨せは安樂集の中に念佛の行者よは始終の兩益ありと云ことを示し玉へり其文曰く經云念佛衆生攝取不捨壽盡必生此名始益言終益者依觀音授記經云阿弥陀佛住世長久兆載永劫亦有滅度般涅槃時唯有觀音勢至住持安樂接引十方其佛滅度亦與住世時節等同然彼國衆生一切無有觀見佛者唯有一向專念阿彌陀佛往生者常見彌陀現在不滅此即是其終時益也とこれに由れはこの如來一向專念の機の前には常住現在して永く入滅を示し玉ハす餘行の往生の機の前よハ滅を示して隱沒ち玉ふ然にこの滅と不滅と實業の者の生滅するの如くおらは其滅を示し玉ふときは專念の機も實に滅を見るへし不滅を示し玉ふときは餘行の機もまた不滅を見るへし若しかくの如きならはろの滅と不滅とに

前後あるへし然に今專念の機の常に不滅と見る處に餘行の機は滅とみるなれハその不滅と滅とは實よこれ同時にて前後あることなしこれよ準するに此如來無始より究竟に果德に安住し玉ふ處ゑ卽また本有ゑして因位の修行ゑ積累し玉ふなり然は其果德と因行と無始より同時よして前後あることゑなし之に由れハ今ま現在の淨土の如來も他方の國土の一類濟化の爲よハ又今ま現在よ因地を示して法藏の修行をなし玉ふ處もあるへし復今ま現在の淨土に在ても一類餘行の機の此如來ハ已に入滅し玉ひて二大士に安住して十方を接引し玉ふと見るもあるへし機類無盡なれは應用もまゑ無邊なりかくの如く知るときハ果德ゑ因位と滅と不滅と無始と今日と本有法爾よ同一の緣起にして無二無別なりと云と誠に怪むへからすこれを佛智に境界の神化不思議の道理と云ことなり必す凡夫淺局の妄解を以て商略すへからも

問　佛境の不可思議なる因果同時の義ハまことに然るへし然らは本有にもまたそに因時の五劫の思惟あるへしや然りと云はゝ本その佛智の不思議なる一念の間に於ても衆生往生に工夫ハ成し玉ふへし何そハゝ〳〵と五劫を經歷し玉ふや

答　これ法爾に道理なり衆生の業感無始本有よ重厚なれは此の如きの衆生を濟化し玉はんとあるは容易に義に非れは佛智と雖ともまた容易よして成し玉ふへからも然るに佛智ハ不可思議なる故にたとひ一刹那に間よも何ろの思惟を成し玉ふことあるましやといはゝ佛智の不思議にとらは本より思惟修行にも及はす衆生の念不

念をも簡はす何ろ本有より一齊に佛になし玉ハさるましや然み佛智と云へとも無縁の機を度し玉ふこゝを能ハす重障の者を一同ま化し玉ふこと叶はさるゆへに今日に至りて現に吾か輩の迷の凡夫あるおりこれ則法爾の約束にて無始より十界に差別本有に歴然たるゆへにその難化の衆生ハ深遠の工夫に非れハ救ひ玉ぬことおりかたし故ま五劫の思惟をおし玉ふものなり然れともそれ劫數のひさしきと云ふは凡夫生滅に上の時分に約して云ふ也佛邊によれハ五劫の處即ち一念おり一念おれとも生滅の歳數ハまた實に五劫也とれに由れハ吾輩のまこゝに化し難か爲にかゝる多少の思惟をおして如來の御心を摧き玉ふと云事をふかく感し思ふへきおり

問　かくに如く因果同時に顯れ念劫融即し玉ふ佛智不思議の境界おりと知るゝきハ其因地ま在て多少艱難の修行をおし玉ふこゝも皆是方便神化の作用と思へはその永劫修行に間施し玉ふ目は一恒河沙の如く施し玉ふ血ハ四大海水に如く施し玉ふ肉ハ千須彌山の如く捨玉ふ舌ハ大鐵圍山に如く捨玉ふ耳ハ純陀羅山の如く捨玉ふ鼻は毗富羅山の如く捨玉ぬ齒は耆闍崛山の如く捨玉ふ皮ハ三千大千界の所有の地の如しゝかくの如く百千無量の手足髓腦を割き斷ち恒沙無邊の血肉身命を施し捨て玉ふと聞くも凡夫の身に受て逼惱楚痛する實苦に如には非るへし實苦ま非して唯その苦相を示し玉ふまておらはまことにこれ遊戯の如くおるへし既にこれ遊戯おりと思ぬときハ凡夫の妄情ま徹して感歎に意のさにみ深からぬやうまおるといふをハいかゝ示し誨ゆへきや

答　經に假令身止諸苦毒中我行精進忍終不悔とも說かれまた忍力成就不計衆苦とも示し玉へハ實ゟ苦惱の事に非すハ何そこれを忍ふとの玉ハんや然ゟ佛智の境界は不可思議なる故に凡夫の實苦の如ゟは非さるへしといふこれはゐる佛教の法爾の道理を知さる妄難おり最も佛智の上に於てハ阿鼻の猛焰も即是本有の性德なれハ何そ實の憂喜苦樂の差別あらんや然れども因地に出て〻修行をなし玉ふときは實に因分の智を以て之を受け玉ふなり然ハ究竟の果位に在て本有の性德を證り玉ふには同しからす但しろの因分と云ふも全く是究竟の果德より顯る〻故にこれを因果同時と云ふ若夫實に果德に異ならは因果不二とは許すへからすと云ハ〻然ハこれ因果ハ本來一なりとをん歟若まことゟ一ならは何をか因と云ひ果と云ふ名を立んや既ゟ因果の名各立ける上ハ豈必ず全く一ならんや故ゟ因果の理ハ本と一ならねとも佛智所證の妙用に於て混融無碍なるを以て是を不二と云既に不二と云を以て物体は本と二なること〻知らる〻也本より二なき物ならハ何ろ不二とは云ぬまてゟも及ハんや唯これ一と云のみなるへし然に不二と云ときは本と二あるものを佛智に融即けるときハ因果並に佛智の一つとなるの故にこれを不二と云ふなり佛智は融即に約せハ唯因果の二法のみに非す一切は有情非情善惡邪正等の諸法數は塵沙ゟ過たるも本來不二ゟ非けと云こととなし然にこれ不二と云へとも今日迷妄の凡情を直に佛智ゟおなしと云んや若これ佛智に同しとならは唯これ佛果の一境のミなるへし何そ十界の依正ゐくの如く宛然たるやこゝに由て

知るへし本來法爾に十界の依正善惡の因果等の差別の法と云もの有て果にハ果の德あるに因よは因の用あり果に德あるか故に十界に依正善惡の因果悉く性德の物となる也因の用あるか故に多少勤苦の修行ある也この道理に由て本有法爾の覺體の上に本有法爾と具し玉ぬ因分を以て修行に出て玉ふるれハ其因分に行に於ては實に勤苦なきに非に然に其困苦の万一を若凡夫に身上に置かハ安そよく堪ゆへきものならんや然れとも之を能く忍ひ玉ふ因地の苦行と云はするはちこれ法爾に大慈心あるを以てなりこれなを世間の親の子を思ふか爲に多少の困苦をなすことあらんに其苦惱の一分を若他人の上になすへきならハ甚ゐ堪がたかるへきことなる歟もそ の親の身に於ては全く勞劬と思ハさるか如しこれそ の慈愛の心念深よるか故なり況や諸佛菩薩の御心に法爾として具し玉ふ甚重至極の大悲骨髓に徹して衆生を愍み玉ふそあるハ世間の親の子を思ふ慈愛に比をへきもに非す故に經に佛言我哀愍汝等甚於父母念子を說き玉へハこの衆生の爲にはいかる重苦を受け玉へとも更に苦惱とし玉はさる也又復かくの如きに重苦に逼惱し玉へともそれをとく忍ひ玉ふと云は菩薩の智力勝くるゝか故なりこれなを世間に艾火を以て小兒に灸するときハ奮動叫喚してその手足を把住せされは堪ることと能ハす然に大人の灸するには或は嘯き或ハ睡り或ハ歌ひ或ハ語りて遊戯するか如くなるもの也艾火の熱きは本と同し事なれとろの色力の强弱と識智の長幼とによるか故にその不同ある也今またかくの如し菩薩の因行の極苦を若凡夫の上に行せ

はゝの一分と云ふとも堪へからさるハ小兒の灸するか如し然に菩薩ハとく之を忍ひ玉ふハ大人の灸するか如しこれ菩薩と凡夫との業力識智に差別あるか故也然は此如來本有究竟の覺體なる故ゟ本有ゟ具し玉へる菩薩因分の行を起して衆生濟化の爲ゟ永劫の勤苦をなし玉ふ也かく勤苦し玉へとも本これ性德ハ理を證してなし玉ふなれは凡夫迷妄の實苦の如ゟは非す實苦の如に非すとてゝの受ゟ玉ふ苦惱ハ一分をも凡夫の身に置かは實ゟ堪ゆへからさる實苦なりこれに由れは其果德を全して因地となり因地を全して果德なり又其無苦惱を全して苦惱を受け苦惱ゟ全して無苦惱なり然るゟきは是因是果非因非果亦因非因亦果非果非因非因非果非果是苦是無苦非苦非無苦亦苦非苦亦無苦非無苦非苦非苦非非苦非無苦非非苦

無苦かくハ如く四句を離れ百非を絶して言路の及ふ所ゟ非るを法爾不可思議ハ聖境受苦ハ相と云なり今この道理を姑く世間の事ゟよせてたとへハ世に大仁惠の帝王有て民の窮通を巡狩し玉ふとき尙その巨細を詳ゟせんゟて潛ゟ匹夫ハ形となりて獨身徒步して諸國を經回あるゟき他の見る人は實ゟ匹夫の想をなしてこれを輕賤しその御身も時に隨て飢寒の苦惱あるへし然ハこれ天子なりとて匹夫の形を示し玉ふときは實ゟ匹夫の相あゟ飢寒に逢玉ふときハ實ゟ飢寒の患あるなりこの匹夫の相あれとも萬乘の寶位を失ひ玉はすゝの飢寒の苦あれとも乞兒等の實に衣食に乏くして困難するこゝろに同しからす之ゟ由れは帝王の一身の上に於る王位を全して匹夫匹夫を全して王位豐饒を全して困乏困乏を全して豐饒な

りこの道理によれはこれ迄た四句を離れ百非を絶すへし知るへし世間浅近の上よ尚此道理あり況や出世不可思議の深理に於て何そ然るへからすと云んや然るときはろの永劫因地の勤苦實よ莫大艱難の事をおし玉ひて戯論の如くよ非すと信すへしかく信するときはまことよ此如來我か輩の爲よ果德自受の法樂を捨てゝ幾許か多劫難作の修行をおし玉ふことの徹底無窮な慈恩の不可思議おるほとを深く感戴せらるゝ者おり

問　本これ大慈を佛心と云ふときハ因分の相ゆ示さすして直に果德を以て修行をおし玉ふへし然に何そ因地に下りて勤苦し玉ふと云や

答　是亦法爾の道理おて修行ハ因分な事おり果上に於てハ修習の義おきか故よ

問　さきよ既に因を全して果や云ふときハ因修即是果行おるへし然は何強ちよ果上に修行を論せすと云んや

答　因を全して果おる故よ即ち果を全して是因おり故に修行の事は果を全ふするの因の上に論する也

問　かくな如く強て因果な相を分別するは何の要義あるや

答　これ法爾縁起の相を成する爲めおり若夫因果を差別せすは混然をして頑虛空の相の如くおるへし然るに現に十界の依正森然として羅列す豈この相混滅すへきや若實にこの相おしと執せは是則斷常の二見に墮す謂これこの相混一にして差別おしと見るは斷見おり唯その混一の相のみと執するは常見おるか故に佛教ハこの二

見を破付す故に因果を建立する也因果あるか故に性具の緣起あるなり若この因果を存せすは性具の緣起を成すへからす緣起を成せすは究竟の果德何に由てか成せんこれよ由て知るへし因分あるか故に果德を顯すなり果德あるよ由て因分を現する也これこの因果相寄て性具の一大緣起をなす也然にこれ唯果德のみなからハ一大緣起をなさを亦唯因分のみなるもこれ同しこれらの道理ハ華嚴の六相圓融の法門と云ぬにて準へ知るへし繁を恐れてこゝ迄へす

源頭論卷之上終

源頭論卷之中

問　論注にの玉ふよるに菩薩度衆生譬如獅子搏鹿所爲不難如似遊戲この義の如きは因分の修行と云ふも實よ勤苦よハ非るへし如似遊戲と代玉ふか故に

答　汝なんそ文を見ることの疎なるやこれはこれ利他出門の釋なり出門ハ自利の行成就し畢て化他よ出るの門なるか故よ亦是因分の上の果德なり總て佛菩薩の上に於ても化他の用をなし玉ふと云は因行滿足代上の事なり故に所爲不難なりこの不難に至んかため に多少の勤苦をなして自利を成就し玉ふなり然はろの因行自利の上よ於て何ろ艱難の事あるましと云んや所謂自利の行とは全くこれ化他の爲になし玉ふ修行なれは自得の爲の艱難にハ非すと知る

へし

問　然らはこれ如來は已よこれ本有究竟の覺體おり究竟の果地より濟化し玉ふおらハ實よ遊戯の如くおるへし何ろ一機一緣のためとて度々よ因地に出て〻多少の苦勞をおし玉ふや

答　これまた法爾の道理おり善惡の二法ハ無始より法爾と定りたる物體也然ハその妄惡を轉しく眞善とおさ〻れは證をうること能ハすこれおを水火の法爾やしてあるものにして水を得されは火を滅すること能はさるか如しこの道理あれとも我輩の如きはまた無始法爾よ底下の凡愚の性おる故に惡性熾盛にしてこれを轉滅すへき微少の善根を修すへきこ〻ろもおしたまく其志を起すといへとも本有に愚痴下根の性おる故に動もすれば退轉してその功を成することとおし故にの玉ふ三恒河沙代諸佛の出世のみもとにありしとき大菩提心をこせとも自力かおはて流轉せり正法代時機とおもへやも底下の凡愚とおれる身は清淨眞實のこ〻ろおし發菩提心いかゝせんとこれおり此よ由て宗家の曰く自身現是罪惡生死凡夫曠劫已來常沒常流轉無有出離之緣と然ハ我等か自力よてはこの妄惡を轉して眞善を成すへき便りは百千万劫を歴とも更みその分おしこれを轉しこれを成せすはまた恒沙劫にも成佛の正因を成すこと能はゞこの故に阿弥陀如來精粹純極の大慈よりこの一切の迷情の妄惡を轉し眞善を成して佛におし玉はん爲めよ我等かおすへき道理の修行を衆生におりかはりてこれをおし玉ひてその如來所修大善大行を以大莊嚴具足衆行令諸衆生功德成就と一念信發代者よ回

向し施與し玉ふ故よこの如來の大善大行即ち衆生の往生成佛の正因となりて易く證りを開かしめ玉ぬ也然はその一機一緣のために　こゝさらに因地に出てゝ積功累德の苦行をなし玉ふハみなその機の上にこれをなして往生成佛の正因になすへき道理なる故よこれに代りて勤め玉ハされハその機の生因おきを以てこれかために度々因地に下りてこれを修し玉ふこと也かくの如きの大慈の因行またゝなはち我等か往生の宿善なりて歸命の信心を發起せしめ玉ふ也故よ一切衆生の宿善と云ふも皆これ佛智の施與し玉ふ處と知るへし

問　かくの如く一切衆生よ宿善を施與し玉ふからは何そ一切衆生一時に往生成佛の信心を發得せさるや

答　またこれ法爾の道理なり衆生の无明无始より淺深の不同ある故よ如來同向は平等なれとも機感齊しからさる也これなを日光は同一よ照せとも盲者は見す翳者ハ幽かに見明眼の者はよく明よ見るか如し

問　若この義によらは實にハ機ゝ方の罪根の淺に由てその益ゝ得ると云へし然は宿善の根本は機邊の德にして佛智の所施には非るへし

答　若然らは機に无明の淺き德あるに由りて佛智ゝからされとも自ら證りに入ると云へき歟いかに無明の薄きものおりともこの如來の本願よ歸せす又諸佛の教道によらすは唯无明のうすきといふまてにしてとゝまるへし然ハその證りに入る根本は如來回施の宿

善に非すは成すへからすこれをを有目の者と云へとも暗中には物色を見るへからす物色を見るは日光の益ゑ由ると云ふへきか如し

問　今この會通ろの理いまた極成せす物色をミるは日光の益なると云ハゝ日光何ぞ盲者をしてよく見せさるや然はそのよく物をみると云は本と眼の德也かくの如く佛法ゑ於て信を生ぜるは正因佛性の上に法爾として无明のうゑき德あるゆへなれは宿善の體ハ人ゃ本具の正因の益なりと云へし然ハ何ぞ他力の宿善と云んや

答　衆生无始より三道ゑ流轉すこの中誰か一毫の種類なからんとあれは阿鼻の衆生といへども佛性の正因ハ本有に具すゆ云こと誰か然らすと云ハん然にその正因に本有として無明の厚薄あるも緣因の力をからすはいつの時か正因の妙用を顯すへき妙用顯れすは正因の名も顯るへからす只本との阿鼻の衆生といふへきのみ然はその正因を正因と顯すは緣因の强力なりこれに由ハ緣因に依て即ちまた正因を成すと云へしこれなを眼はよく物をみると云へとも日光ゑ强緣なくは見るへからす物をみすは眼と云ものには非すもの見に由て眼と云ふ德あらハるゝなり然はろの眼ゑ德を顯すは日光の益なれハ日光の緣因にて眼の名を與ふるか如しかくの如く正因にいかほと无明うすくとも如來回向の宿善なくハこの信を發すへからすこの信發らすハろの正因ハ永劫にも顯るへからす顯れさるときは何をか正因と知るへきや然に如來回向の緣因にて此正因の妙用あらハるゝなをば本ろの正因を發起し玉ふハ如來回向の强緣力ゑ由るか故にこれを宿善の本ゆ云也又復理實にはその正因

と云ふも本とはこの如來の自性本有の德の法界に徧滿し玉ふものなれは即ちこれこれ佛の體德なり故に他宗には己心の弥陀と觀して自心を發明せんとする也然れども此れハたゞ末に就て觀する故に其行これ難し淨土の法門ハ直に本の本に付てこれを念する故に其信成し易し

問　如來に性德衆生の正因なるか故に是則宿善の根本直にこの如來の自性なると云はゞ然は阿弥陀如來も一分は迷の中に在りと云へきやすてにこれ迷の衆生の性となり玉ふと云ふか故に

答　如來の自性ハ本來迷と云ものなし故に阿鼻の依正も全くこれ本有性德に上ゑ具するものなり然るこの如來の性德凡夫の正因とおるると云は十界に通して如來藏性に非さることとおきの故に然をこれ迷中にも如來に性を具すれハ一分如來に性も迷にあるへしと云ふは即ちこれ迷の凡夫の心より思ふ事なりこの迷の心と云ハこれも無始本有に無明の妄心と云物有てこの心より妄りに分別して如來の性を人我と執するに由て迷の境界をなるこれを起信論ハ以不達一法界忽然念起名爲无明と示し玉ひて本來は唯この如來藏性一法界のものなるを忽然と一念不覺の妄心起動するこれを業相と名くこれより轉現の二相を生して諸法の差別をなすなり然にこの三相ハ尚微細ゑしく第八賴耶の中ゑ在れとも次第に麁强の見と成て智相相續執取計名造業々繫の六麁を生して三界の輪環無窮にして止むことなし然はこの三細六麁の迷の本源ハ一念無始の无明なりこれ无明と云ものは即ち如來藏性に即してある物なれはその

如來性法爾無始なる故に无明もまた無始なり無始なる無明なるに由て迷の衆生も無始より法爾とあること也かくの如く無始とりある无明なれとも无明の體は虛妄の物なる故に實體なし唯是法性の變したる物なり其法性を變して无明になすと云ふハこれ無始法爾の約束なれハ其本何(イカン)と計るへきこゝをなし故に忽然ゝ云ふなりかくの如く法性變して無明なる故に無明の實體ハ如來の性なりこれなを寒來て水を結んて氷となすか如し氷を離れて別に水を求むへからす氷とけぬれハ本の水なり然ハ氷には相有て體なし其體は水なるか如し無明も亦然なり一念の不覺に由て如來の性を无明になすとき无明は相有て體なし其體は法性也然は如來はこの道理をさとり玉ぬ故に三界六道をもに迷と見玉ふものはなしそれを迷とみるはこの衆生の妄見より思ふ也然にその妄見ハ本實なし其體即是如來の性なる故にこれを以て衆生の正因は如來の性德なりと云ふこと也こゝを以て如來は性には本より迷不迷の名はなし凡夫は上より迷悟の差別を論をと知るへし故に凡夫もこの如來の教に由て其無明の妄心を翻すときは無明即これ明となり煩惱の當體即これ菩提となり生死の全體即是涅槃となる也かくの如く究竟して悟るときは生死ゝ云ふ涅槃ゝ云もまたその名字なし故に生死涅槃猶如(ニ)昨夢(ヒ)と說玉ふなり而してゝの名言を絶する物ハ唯この阿弥陀如來の性德のゝなりと知るへしこの故に淨土に生して證りを開けは弥陀同體になるとはこのいはれなり

問　この義によれハ甚た大疑難ありその故は衆生無始の妄心に由

てこれ如來の性を變して無明になすものらハ何ゝ本有究竟の如來の性德妄心に牽れて無明をなるゝや又この如來はすでに大慈心の精粹なるか故ゝことに衆生の迷を轉して悟に入れしめ玉ふとあれハ他の迷の衆生をたにも悟らせ玉ふ如來の性德にして何そ妄心にひかれて無明と變し玉ぬや復若し實に妄心に變せは今の凡夫の如きたをひ一たひ悟りを開くもまゝ妄緣に牽れは無明とおるへきや

答　是唯一往の說を認めて深く佛教の道理を極めさる故に此疑ひあり知るへし此如來の性德を變して無明ゝなすや云は直ゝ究竟の覺體の无明ゝ變すると云ふにハ非す本有究竟の阿彌陀如來は大慈心の精粹より顯れ玉ぬ故ゝ无始より不變不變也これなを大陽の極精の天の日輪と現するか如し然ゝ衆生の妄心に變する如來の性と

云ふものは燧の中ゝある火の如しこれにより本來天の日輪の陽性も燧の中の火の陽性も性はかはらされともその德は全く異なりなくの如く阿彌陀如來の究竟して證り玉ふ佛性も衆生ゝ妄心に變する佛性もその佛性と云理はかはらさるゆへに衆生も如來と同しと云こと也然れとも究竟ゝ在る佛性と妄心ゝ變する佛性とハ其德甚ゝ異なり其德は異なりと云へとも其性ハ一致なるを以て如來の方よりハ生佛同體と證り玉ぬ也この證りの知見ゝ方とり如來の性を衆生ゝ具するを云こと也然れとも凡夫の邊にハいはたこの理をさとらさる故に只理に如來の性を具してゐると云ふまてにしてその如來の性德の働を顯すことなしこれなを天日ゝ燧の火との差別あるか如し其性はかはらされとも燧の頑鐵の中に日輪を入るゝと

は云へからす日輪の方よハ頑鐵の中の陽性を具してあるかりかく
れ如く無始より法爾として生佛の差別有て而もその性同か故に如
來本有の大慈心より衆生の妄心を轉して自體の性德と同一の作用
をなさしめん爲めにこの大願を建立し玉ふ也まことよく此道理
を明らめハ來難自ら解すへしこれに由て知るへしこの如來の性と
衆生の性と其性同しきか故に衆生の正因もまたこの如來の性なり
と云こと也又復佛性妄心に變せハ成佛の後もまた變すへしやとの
義はこの會通ハ楞嚴圓覺の中よ世尊の說玉ふか如し撿して知るへ
し繁を恐れて贅せす但し略していハ〻衆生の佛性は無始より法爾
として無明に變して在るこの也諸佛の佛性は證智を以て無明を變
して本との佛性よなし玉ぬ者也故に再ひ無明よ變せすこ〻を鑛

の無始より金を雜るこのを鑄てこれを眞金になせは再ひ鑛とならす
さるの如しこれハ諸佛の修證ある上にて論する也阿弥陀如來ハろ
の諸佛の本師なる故に無始とり法爾として無明に變し玉へる如來
には非すと知るへし

問　さきに示さるゝか如きハ他宗は末に就て觀し淨家は本よ付て
念すと豈に佛性に本末あるや

答　これ上來の答に準して知るへし佛智に約せハ實に本末なし衆
生より論せハ何ろ本末なからんや但し衆生の方に於ても實によく
圓解を開かは本末なしと知るへし爾れとも只これ解悟の分齊のみ
證悟して直に佛性に相應せすハ實に本末なしをは云へからす況や
圓觀を云へとも其の初心に於てをや

問　又さきよいふる如きハ諸佛の教道もこれ緣因となると然ハ諸佛の法門も正因を發する宿善となるへし然りやいはゝ何ゝ偏にこの如來に回向を一切衆生の宿善に根本なりと云や

答　諸佛と云ふも本ハこの如來の分身又はこれ如來の教を受て證り玉へる弟子にて在せはその教へ玉ぬ法門と云ふも即これ此如來の教道也これに由れは八萬四千の教門とり乃至世間の道を教ゆる儒道の理りまても悉くこの如來の教道よ非すと云ことなし何やてかくの如く無量の教道を開き玉ふと云ふこれ亦法爾の道理なりゝの故ハ一切衆生の根機法爾として万差なるか故に必す一佛一教を以ては調化し難し現に今ま世間の相を見るに血肉を分つ親子兄弟の中と雖ともその利鈍善惡及ひ志求樂欲一準ならしかくの如きの道理法爾として改むへからすと云と次よく知しめす佛智より無量に分身を現して異佛菩薩に名を顯し無數の法門を設けて誘引し玉ふなりこれすなハち觀世音菩薩に三十三身を現して衆機の差別に應して宰官婆羅門長者居士乃至童男童女等となりて各その機類に順て得度すへき法要を示しる濟度し玉ふか如しこれなを鳥をとるよ衆目の網を張るか如し鳥をうるハ只一目なれやも一目ハかりにてハ多くの鳥ハうへからすこれ故に衆目をこしらへて網としてゝの鳥をとるなり然にこれ衆目といへとも又只一つの網と云ものゝ外よ非るか如しかくに如く無量の教道を差別し玉へとも弥陁一佛の一法の外には非すこの故にいつれの教にてもさやりをひらくへき宿善よなると云ハゝなるこれ如來の教道の宿善なりこゝを以て

初頓の華嚴には普賢菩薩は十大願を以て極樂の往生をもとめ玉ひ
開會の法華よハ後五百歳に衆生安樂に生すへしと說玉へり其の外
一代の時教處々往々にこの如來の法門を示し玉ふは本體本意の教
道なる故に聊にても機緣の聞くへき便りある處にては自然に漏れ
顯してこれ法門を勸め玉ふ也故よ妙樂の釋よも諸教所讚多在弥陀
故以西方而爲一準を示し玉へりこの道理に由て龍樹大士は楞伽の
懸記よ應して念佛无上の法を宣說し歡喜地を證して安養よ生し玉
ぬ然るときは八宗の法門みな念佛に過きす中よ於て別して眞言三
論の開祖とするおれはこの宗々の至極念佛に非さるへきや弥勒菩
薩は大經の付屬を受て三會の席上までこれ流通し玉ふ天親菩薩
は大小乘千部の論師おれとも別して三經通申の論を製して自身願

生の地を安樂に求め玉ふこれ二大士ハすなハちこれ法相宗の祖師
おれは相宗究竟に法門念佛に至極すること明けしこの故に華嚴の
智儼天台の智者ともよその終焉よ佛名を唱て淨土よ願生し玉ひ三
論の嘉祥法相の慈恩並に章疏を製して此法門を發揚し玉ふなり知
るへし曇鸞大師ハ四論の本宗を改め道綽禪師ハ涅槃に廣業を閣き
てともよ此法門よ歸入し玉へり此の如く八家の名德高僧をはしめ
教外の禪德及ひ世間の大儒よいたるまて智行兼備て有德に人師な
る程の類は古とて今よ至りて畢竟してはみな悉くこの念佛の一
法に歸依せすと云ハなしこれうの大觀卓識とり諸教に至極はこの
念佛に法門に結歸すと鑑み玉ふに由て也こゝに知る釋尊一代所說
の法門大小漸頓偏圓權實その品ハ萬差おれともその根本ハ唯この

彌陀の一教とり名を替て說き顯し玉ぬ者也然ハいつれの教道と云も本はこれこの如來の教法なれはその教々を弄引として衆生の正因を起さしむる良緣をおりて衆生にその宿善を與へ玉ふとも全くこれこの弥陀の一法より方便し玉ふなれハ至極究竟の宿善の根本ハこの一法に局ると云ハこれおり然にかくの如く諸教と差別するゆへを討れハその實大圓頓の教と云ハ直にこれ諸佛のさとり玉へる道理を示し玉ふもの也これ諸佛の證りと云はゐくれ如くなる者おりと示しるこれを衆生に聞かしめて諸佛れ境界を忻慕せしめ玉ふ也而してその證に至るへき修因を教へ玉へともこれまた因果不二と達する修行なれハ諸佛證得の上ゑ非れは及ひ難き修行より然は畢竟して一切凡夫の企ておすへき法門に非す何とてその凡夫の及ひかたき法を說き玉ふそなれはこれ衆機万別ゑして直爾に念佛の法を信することを能はさる者のゑめに姑くこの果上れ沙汰を說き聞かせてその凡心に佛法を殊勝ゑ思て信るこゝろを萌さしめ或はゐの教門れ修行を一分企ておさしめてそれ修する善根及宿善として終ゑはこの念佛の一門に皈入するやうにおさんとあるの善巧かりこれを聖道權化の方便との玉ぬこと也權化の方便とはその聖道圓頓の法を淺近の教としてれ玉ふには非すその教は實に佛果れ法門なれは至極最上なれともこれハ唯佛與佛の上の法門にして凡夫の修すへき教ゑ非す然れとも衆生の念佛ゑ歸してさをるへきの機のとゝのほらさるゆへに姑くその機の調ふまての弄引の爲に在世の權者の聲聞菩薩衆とこれを說て衆機の佛法ゑ信を生するやうに

なし玉ふ故に權化の方便とのたまふ事也又權大乘の法と云ハいまた究竟圓頓の法を聞て信を生すへき機の調はさる者の爲に塵沙差別の法理を說きてこれを由て佛法の信を生せしめてゝの修行を企ておこさしめ玉ふ也爾れとも これなを凡夫所行の法門に非る故に凡夫のこの法に由て證りをうると云ことなかれハ終ハこの法に由て修行する功德善根の功を以てこの念佛の法を聞て信すへき機となさしめ玉ふ宿善を設々玉ふ者也これ餘の人天及ひ小乘の教と云も皆お念佛に直往の因緣なき者の爲にこれを教てその所修の行業を宿善として終にはこれ念佛に歸入せしむへき爲也故に觀經の中輩生に小乘人天の小因をも回願すれは淨土に生すと說き玉へるハこの弄引の本意を顯し玉ふ也但し他宗四教五教と判して小機を弄引して究竟の圓理に入らしむると示さるゝもこれみな大聖權化の上の法門にして衆機に佛教の信を生せしめ玉ハん爲の方便なり佛教に信を生するときハ弥陀の淨土へ生せされはこの佛地究竟の法門をさとるへからすと知るか故に終には念佛に歸して淨土へ生せしめ玉はん爲なりこの故に智儼天台等の圓人盛に淨土を願生し玉ふハこの道理なりかくの如く知るときはいつれの諸佛の教道と云も念佛の爲の宿善に設々玉はすと云こなかし故に宿善の本と云ハ念佛一法の外はなしと云はこのこゝろ也但しかくいふを惡くこゝろえては一代の聖教ハ淨土の教へ局りて餘法ハおきやうに思ふ也これ太た非なり餘法万差にあることハ勿論なり爾れともこれハ姑く引機の方便なり凡夫所修の行に非す唯圓佛智の上の法門を

示して見せ玉ふ義也といふこと也これを示してみせ玉ぬは念佛に入らしめん爲かり故に一代の教は皆な念佛に爲の弄引と云ふ也然よこれ我淨家一宗に上にてかく云ふのミに非す華嚴宗にてハ一代の教門皆な性起の法なれは舍利供養の事までも華嚴よ非ることなしと云ひ天台宗にては諸法性具の法門にして治生産業までも一實相よ非さることなしと云ふ如し宗々各こに旨を立てゝ一代を攝し入れとも理實にハ凡夫の轉迷開悟するは念佛よ由らされは能ハさる故よ今ま一代の法門ハみなこれ念佛の方便といふこと也故に法事讃に曰如來出現於五濁世隨宜方便化群萌勸種々法門皆解脫無過念佛往西方と元祖これ文を證して聖道に教を以て方便と判し玉へり但しこの文よ種々の法門皆解脫すとあれは何そこれを方便の證據とにへきやと云ふに上に隨宜方便化群萌と云て次て種々法門等との玉へハその種々法門に解說すと云は衆機の調ひかたきか爲よ姑く宜に隨て方便して群萌を化するゝと云ふ法を示して見せ玉ふ也然れとも實にその法にて解說すること能はさる故に下に無過念佛往西方との玉へは明に知る念佛往生の外ハ皆な方便を說たることそとの玉へり故に口傳抄に聖道の法よたへさる機のたゝに如來出世の本意に非さとも易行なる處をとりどころとして念佛を衆機に亘して勸むるやうにミる人の思ふならんと海德佛とりこのかた釋尊までに說教の本意ハ久遠實成の彌陀のたちとより法藏正覺の淨土教のをこるを初めとして衆生濟度の方規ハ只念佛の一法也然にこの淨土の教法とゝのほらさるほとは姑く在世の權機に對して

方便の教として五時に教をとき玉へりと知るへしとゝへハ月まつほとの手すさみの風情なり海德已來乃至釋迦一代に出世の元意彌陀の一教を以て本とせらるゝ大都也と示し玉へりこれらの道理を以て諸佛の教道に衆生の正因を發起する宿善になると云も本とはこの如來の法よりをこし云ふ宿善なりと云ことも也これに付て彼の宿善と云ふ又品あるを云義を知るへし一二は本を此如來法爾として大慈純粹の心無始より具ち玉ふ故に一切迷妄の羣機を哀愍して無始より永劫の勤苦をなして其修行の間血の海肉の山となりて衆生に結緣し恒沙の功德を滿足して悉く令諸衆生功德成就と回向し玉ふ故にこの如來に大慈善根力我等か宿善と成て終には往生淨土の信心を發起する也これなを螺贏の螟蛉を祝するゑ螟蛉變して蠮螉と成るハ本と螟蛉の願て變するに非されとも螺贏の祝念たへさるにゑ由るか如しこれは如來因分の德ゑ於て施し玉ぬ宿善なり若果上の德ゑ由れは光明徧照十方世界の利益に由て斷へす法界の群類を照し玉ふを以てこの光照の緣に由て正因を引起して終にハ往生の信心を發さしめ玉ぬ也これなを春光の德に由て玄冬ゑ枯たる根芽を發生するこの如し故ゑの玉ふこの光明の緣に催されて宿善の機ありて他力信心と云ことをいまするゑたりとこれに由れハ如來の因果に德の上よりこの信を發さしめ玉ふを宿善に本と云こと也この宿善に由て法爾ゑこの如來に機緣重厚の人ハ直往の菩薩と云ふか如く初めよりこの念佛を信して無始の昔より淨土ゑ往生するもあるなり一ゑハかくの如く如來大悲の止むこをなく無始よ

り宿善を與へ玉へやもまた法爾として無明の深重なる者ハ多劫より生死に流轉していまたこれ信心を發起せぬありこの機の中に於て又二類あるへし一には法爾の樂欲に由て初とり念佛を信する緣なく餘法を聞て信緣を成すへき者ありこれか爲に諸佛の教道と云こと玉ふ設けて萬差の法門を開き生々世々に種々善巧して佛道の信を發こさしめて終にはこの念佛を信する機となし玉ふ也これ二重に宿善を施し玉ふと云ものなりこれ機の爲に諸佛の教道宿善となり玉ふと云也爾にその教道と云ふもすなはちこれ如來愍念の方便よりなさしめ玉ふ故にこそ如來の宿善と云こと也一にはかくの如く餘教の法門玉以て擬宜誘引し玉はんとし玉へやも一闡提の類となりて生生に諸佛の教道にも逢ことかなはず偶あへともすへて信根を生せさる者ありこの機の爲にはひとへに大悲の胸を焦し玉ひて或は父母妻孥有緣の親屬及ひ禽獸虫魚乃至飲食寶貨の類ひ山泉艸木に類ともなりて彼の機の所愛の物となり聊かなる緣を以てこれを結ひ或ハ淫女奸偷等の類と成てそれ事を同してこれを導き或ハ世儒孔老及ひ諸子百家者流の教を設々てこれを緣とし或は諸の妓藝百戲の道となりてこれを誘ひ又ハ諸神と現してその威愛を顯してこれ玉調へ玉ふかくに如く千計万變して結緣し玉へども法爾の業障ふかきに由て現生に至ても尚一生造惡にして十惡五逆をなし終に臨終の刹那に至るまても佛教を聞信せぬもにあり然れともろの生々に種々方便の結緣に由て臨終に惡相を見て恐怖するとき始て善知識開化に由て信發して往生をるありこの機は過去生々に値

法の縁なき故にこれを無宿善往生とは者と珍海は定められたり故に元祖のの玉く往生程の大事必す宿善に依るへしと聖教にも候やらむ但し念佛往生は宿善の無にも依り候はぬやらむ父母を殺し佛身とり血をあやしたる程の罪人も臨終よは十念申て往生すと觀經よみへて候然よ宿善厚き者は教へ候ハねとも惡よ恐れ佛道に進むことにて候へは五逆なんとはいかよも〳〵造るましきこと也夫に五逆の罪人念佛十念よて往生を遂け候やきに宿善の無よも依り候ましく候とこれ過去に値法の縁なき處を無宿善との玉へとも實に往生の信を成就する處ハこの如來の異類の縁を以こ姪女奸偷等とるりて施し結ひ玉へる宿善あるに依る也然は往生の信心を發起するはみな如來施與の宿善に非るこやなし然れとも一生の間不信造惡

に機は値法の縁なき故よ是を無宿善の根機にはちからをよえすや仰せられたるはこの機の事也然よ平生より佛法を深く信してことよこの他力の大心を堅固に獲得する機はこれ偏に如來の方便とり過去生生よ於て或ハ諸佛の教道を聞し或ハ諸佛の勸誘よ逢ハしめ佛法よ縁を結ひ來らせて終には今生よこの他力の大信を得る機となさしめ玉ふ者也故に經にハ若人无善本不得聞此經淸淨有戒者乃獲聞正法曾更見世尊則能信此事見敬聞奉行踊躍大歡喜乃至宿世見諸佛樂聽如是教と說玉へる但し此文に由れハこれ自力の修善宿善やなりて今生にこの法を信するやうよ見へたり過去に所修ハこれ則諸佛の教道なれは自力の戒行なれともその行を以て直よ悟りに入らしめ玉ふと云には非す凡愚の性たる者こに諸佛の教道よて直

よさとるべし云ふことは實より及はさるるれども姑く機緣の樂欲に順てこれを修せしめてこれに由て佛法の信根を發起せしめ又其所修の功力に依て終にはこの弘願に法より逢はしめ此大信を成就おさしめんとし玉ふこの如來の種々善巧の大悲心より設けおさしめ玉ふ修善おれは過去に諸佛の教道に聞て自力清淨の戒を持つと云處即ちこの如來大悲施與に他力の宿善と云事也故に祖師のの玉はく世々生々より无量无邊の諸佛菩薩の利益によりてよりの善を修行せしかとも自力にてハ生死に出すありし故に曠劫多生のあひた諸佛菩薩の御勸めによりて今まもあひかたき弥陀の御ちかひに逢ひまひらせて候御恩に知らすしてそのつの佛菩薩にあたよまふさんハ深き御恩を知らす候へとと知るへとこの御言の中に初に世々生々

より諸佛菩薩の利益にてよろつの善を修行せしかとも自力より生死をいてすありし故にその玉ふは一往淨教の信いまた熟せさる者の爲に諸佛の教道と說玉ひてこれを勸め玉ふ處おりこれ經に淸淨有戒者乃獲聞正法と說玉ふこゝろおり次より曠劫多生に諸佛菩薩に御勸より由て弥陀の誓に逢とあるハ世々生々の已前に自力の修善を教へ玉ふを聞てすてにこの他力の信を得へき時緣漸く熟する故に諸佛菩薩更よこの念佛の一法に勸め玉ふに由て過去にすてよその法の理を聞たる宿善顯れて今生に正よとくこの大信を獲得する身におるとあるの義也これ經より曾更見世尊則能信此事見敬聞奉行踊躍大歡喜と說玉ふこゝろおりこれを又異譯に經よハ過去已曾修習此法今得重聞即生歡喜と說玉ふはこれおりこれに依れは今生よこの

他力の大信を獲得する身となるは一往の宿善に非す多生に諸佛の教道を聞かしめて之を由て此如來の法に始て値遇し此如來の法に値遇して過去に之を修したるに由て今生にかくの如く大信を決得するなり但し過去にすでに此法にあハゝ何そ過去に即ち大信を得て淨土に生せすしてこの生まて尚生死を在るやと云はゝこの无上の大信實に難信の事なる故に一往の宿善なりては堅固の信を發し難し故を過去に始てこの法にあへるもいまた眞實に佛智の大信を得さる故を尚この生を感してその過去の値法の緣熟して无碍の大信を成て順次に淨土に生する身となること也これ現に今世を見るかゝ如し同し念佛の法を修行する人あれともいまた眞實に他力の大信を得る人希なりこれらの人は順次にまた人中に生し來りてその生にて佛智の大信と云ことを領納して第三生を淨土に生するなりこを則果遂の悲願乃御利益なりと知るへしこれらの道理に由て思へはこのたひこの無上の信心を發起して順次決定往生の身となると云とは大低大形の宿緣深厚のゆへにハ非る也と知らるゝなりまこと也ことを甚難希有の事難中之難無過斯難と說玉へること豈を疎に喜ひ奉るへきや故を此玉ふ弘誓强緣多生難遇眞實淨信億劫難獲偶獲行信遠慶宿緣と然るに吾か輩らこの喜ひのまことにまれなるはこれいかなる淺ましきこゝろそやと慙ち悲まるゝこを也上來の義に依れはこの宿善と云ふに付て一にハ直信二には無善三にハ有善四をハ重修かくの如きの差別あるなりこの差別あれとを其本は悉く皆如來御回向の大悲心より施與し玉ふとなきハ總ていふときは

他力は宿善に非ることなし然よ此中有善の宿善を一往にこゝろうるときは實に自力所修の善根宿善となるやうよ多は人のおもふこゝを也これ必す然らす前とり云ふか如く自力所修の善根と云ふも如來の方便よりなさしめ玉ぬ者なり故よ祖師の御言よも世々生々によろつの善を修行せしかとと自力にては生死を出すありし故よ曠劫多生よ諸佛菩薩の御もゝめによりて弥陀の御ちかひにあふとは玉ふハこの御言ハまたろの曠劫多生に諸佛のすゝめ玉ふと云は方便の自力の修善にもかゝりまた自力修善の機調ゆへにこの如來の法をすゝめ玉ふゝと云ことにもおるるおれハ自力所修の善根を諸佛のすゝめ玉ふ處すなハち此法に引入し玉ぬへき調機弄引は方便なり總て吾祖の御言ハるやうに兩義に通するやうに示し玉ぬ微妙の釋義なり然は祖釋の文義を見るには必すこの意を以て伺ひ奉るへし然ハこれろの自力の修善も本は全く他力の方便なり故よ今ま世は中に諸宗の法門を修して信心ぬかき人ありこの人ハろの所修の法よて悟りに入るへき樣に思へゝも實よハこの法を修する功力にて終には當來に弥陀の法を信する機と成て淨土よ生する也然ハこは世にて修する餘法ハみなこの弘願を信する機ゝなるへき宿善をなす事也と知るへし故大阿弥陀經等に曰く佛言其有善男子善女人聞阿弥陀佛聲慈心歡喜一時踊躍心意淨潔衣毛爲起淚即出者皆前世宿命作佛道若他方佛故菩薩非凡人とこれに依れハ今生よ此如來の法を聞て身の毛いよたち淚を出してよろこふ者は過去の諸佛の所にて法を聞し故の菩薩よて凡夫にハ非るゆへ也と然ハこれその故の

菩薩ならは何そ諸佛の教を聞く時に佛にはならさるやこゝに知る三恒河沙の諸佛の所よて大菩提心を發すほとの菩薩にてありし身なれとも自力の修善にてハ悟りよ入ること叶はさるゆへに又今日の凡夫とかりて終にハこの如來に法に逢て信を發して淨土に生する身とかるとあれハ況や今日の凡夫の身として諸宗の法を深信すとも他の法よて順次のさとりを開くと云こととはかりかたし故にこの所修の法德を以てまゐ當來にこの法を信して念佛往生の利益を得へき宿善とかさしめ玉ふなれハ今日他宗の法門を修行する人はこれこの法の宿善を勤むること也と云義かり然れは此の如く多生に餘佛の教道に値て幾許の善根を修すれともろの善根と云ふは如來に方便なれは全く機の方に於てハ曠劫とり微少に善因あると云

ものに非す機の方の善根よ非る故にその餘に法にて成佛をること能はさる也故に機に方に於てはいつまても曾無一善唯知作惡と云こと也こゝを以て宗家は曠劫已來無有出離之緣と信すへしとの玉ふかり然れハ機よ於ては一個の宿善を云ことを論すへきやうなし是ゐ由て宿善の根本ハ弥陀同向の外よりハなしと云こと也かくの如くこゝろうるを他力宿善に道理を知るを云ふ也然よ古老の書物の中に宿善に二種に義ありと云て一にハ總宿善この中に又二あり一よは泛時の善これは低頭合掌等に少善也二には繫念の善これは正に佛法に値て修行するを云ふ也これ過去已曾等とに玉ふこゝ為これ也二にハ別宿善即これ他力の宿善也淨土門のこゝろは曾无一善無有出離之緣と信すれは機よ於ては宿善なし只彼佛の因中

に三業の修し玉ぬ所みな眞實にしてこれを衆生に施與し玉ふ故に行者の宿善になると釋せりこのこゝろの如きは總宿善とは餘宗餘法より通して佛道を修行する因緣でなるものを總と云ふなるへし然ハこれは通總の義にて一切の佛道修行に通していふ宿善のことなりでなるなり然らハ他力の佛智に歸入けるも一分ハこの總宿善の自力の善根より弘願の法より逢ふと云へしや若爾は他力の信心を發すと云も根本は自力の宿善より企て及ふことゝ云ふになるへし然ハ何そ他力回向の宿善と云ふことを許さんや然よこれ總して云ふときはひろく自力所修の宿善なれとも今他力に歸して往生け行人となるは如來の別宿善によるなれハ淨土門のこゝろよては唯この別宿善の方をとりて總宿善の方をハとらす總宿善とは聖道門の上にて沙汰する宿善のことなりと云ハゝ何そ過去已曾の文を総宿善の證とするや過去にすてに此法を修する故に今重て聞でなれハ過去の値法も即ち念佛なりこれ念佛の宿善を聖道の宿善とすへきや又總別と云ふときは總は別を總するなり然は別宿善の他力回向と云ふも總宿善け泛時繫念より別れて出る宿善と云ものになるへし若此の如ならは此他力の信を得ると云ふも總して無始已來泛時繫念の宿善有て終には如來回向の別宿善よて往益を成すでなる云ふよ成るなり然ハ自力け宿善根本となり總と成りて他力の宿善は末となり別となるになるへし此の如きは宿善の体二途よなれは眞に他力の宿善の深義を成立すると能はす按するにこれは若人無善本等の經文

を一往文の上を認て自力の宿善の義ありとみる故ゑ此二釋をなすとゝへたり此經文ハ自力の宿善なれとも實ハ如來方便の施設にしてこれ又如來の方ゝりなさしめ玉ふ修善ゑ云事を辨へさるによるなるへし然はこれ恐くは宗意を詳にせすしてさきの祖釋の諸佛の御勸めにて此信を發すとの玉ふ殊に心のつのさる故おらん歟人の上をいふへきにハ非れともこれ又宗旨ゑ極要なるゑ多ハ我この門の人の此こゝろを得さる者あるなれハ因ゑこれを評量するなり初學の人はゝく心得わくへきこと也これゑ依れは地體ゑ總別ゑ宿善と云ふ名目を設くへき者ゑ非す唯一獨立の如來の宿善より外はなき也若し强て總別の名を立んと思はゝ總宿善とは他力回向の法也別宿善とハその他力總宿善の中ゑ機の不同に由て或は直ふ此法を信するあり或は行善なくして生するあり或は泛時繫念の宿善をなすあり或はこの法を重修するありと云へしこの差別有て往生の緣因を成すれともその總體はみな此如來回向の大悲心より發起せしめ玉ふなれは如來回向の總宿善の外はなしと云はこのこゝろ也故ゑの玉ふ釋迦彌陀は慈悲の父母種々ゑ善巧方便しわれらか无上の信心を發起せしめ玉ひけりとこの種々善巧方便ゑの玉ふ中にさきの差別の弄引の宿善を攝する也この方便より无上の信心を發さしゑ玉ぬとある上ハ何ろ泛時繫念ともに如來所施の方便の宿善に非すして自力の宿善にてこの信を發起せしめ玉ふと云ふ道理あるへきやこれに由れハ過去ゑも今生にも自力聖道の修善をなすと云ふも皆これ如來の御方便よりおさしめ玉ふ者なれハ理實にハ凡夫の方

の働にて善の三業をなすと云義はなきこと也然れども法爾の因縁不同なる故よりまた他力弘願の本意を知らざるうちは己か善己か功德と思ふて修するなり然るにその善ろの功德にて直に悟りに入ること能はざると知るべき弘願に歸する信心發起する也またろの多生の修善の功よ由て佛智を信する機を熟し來るなり然るときはこなるこれ如來のこの弘願に入れしめて淨土へ引接せ玉んとある御方便なれハその自力の修善と思て修する者も皆如來回向の方便力なり故にの玉ふ如來の作願をたすけぬれは苦惱の有情をすてすして回向を首としたまひて大悲心をは成就せて往相の回向とべくことは弥陀の方便ときいたり悲願の信樂をしむれは生死すなはち涅槃なりと是此文の上は弘願の信心を正しく發起させ玉ふ所を示し玉へともひろくその本を推し及すときは直信の機のいまた調らざるときハ聖道自力の教道と說き開きてこれを修せしめて之に由て終に弘願の大智海よ引入し玉ぬるれは過去生々の自力の修善と云ふも即ち如來の回向を首べし方便をとき玉ふゆへを知らるゝ也然はその自力修善ハ三業尚是如來回向の方便と知るべれハ何よ況や今己に弘願に歸投して顯るゝ善の三業行者自己の働と思ことあらんや故よ稱禮念すれとも自の行に非すたゝ阿彌陀佛の行を行すとの玉ふこと也これらの旨をとく辨ゆるべき宿善と云ふは唯この如來回向の一法とり外ハなしを云ふ義を明に知らるゝ者也

源頭論卷之中終

頭源論卷之下

問　他力の宿善にて衆生の淨土に往生すと云ふ道理ハまことに然るへし然はこの回向の宿善をいはゆる發起し玉はぬさきは衆生の淨土に生すと云ことはあるへからす然ハそのゝきハ只能化の如來一體のみにて在して所化ゝ聖衆はなかるへしや然りといハゝその淨土の初ハ今現在の淨土の主伴相依て正報の莊嚴をおし玉ふに同しなるへからす若然らは何そ無始と再成と全く同と云んや若强て同と云ハゝすてよこれ如來ゝ宿善を施し畢り玉ふ後に非すハ衆生生すへからす然は豈そゝ宿善を回向せんゝ發起し玉ふ如來最初の一念なくはあるへからを實よこれあらは衆生の聖衆となりて始て淨土よ生するときあるへし始て生する時あらはゝてにこれ始めある

おり何ろ無始と云ハんや又ろ代初生あらハいまた生せさるおかしもあるへし然ハろの時は何そ只能化ゝ一佛代みに非さるへきや若然らハゝいはゝ能化も聖衆も無始より本有にあるへきや然ハそれ聖衆は如來の宿善よて生すと云ふ者には非す本有ゑ聖衆となるものおるへし若ろれ然らすはこの如來の宿善にて無始より聖衆の生すと云ふの道理いゐゝこゝろうへきや

答　この疑は固に妄情の恒難おるまはよく思ふへしすてにこれ无始と云ふ何そ其始を求んやまことにこれ始あるものからはいかんそ無始と云ハん然れともその能回所回を分ち又その能生所生を論するときは姑くこれ生滅の相よ似たれはその本始を怪しむも宜へおり今これか爲に一往ゆの道理を辨せハ先無始本有法爾と云言ハ

總して法性ゆ云物に付て云ふこと也法性と云は一切諸法の體性にして實にその始終邊涯おきものの也たゝへは現に見る虚空の如しこの虚空何れの方を始とし何れの處を終と定むることあらんや爾るよかくの如くその始終邊涯無き物也とて虚空の相おしゆハ云へからすこれに準して知るへし法性も即ち此の如く實よ始終涯畔おし而して其虚空と云も即此法性の中より生する也故よ經に曰く空生大覺中如海發一漚ゆまことにこの法性かくの如く廣大不可思議おる物ゆへにゐゝこの虚空を生するのみに非す地水火風及ひ識等の五大をも生するおり爾はこの地水火風空識の六ともに合しては六大ゆ名付る也すてよ大と云おれハ各邊涯おきもの也この涯邊おきものを生ゝと云はこれまた能生所生あるよも非す六大の當體即法

性なり法性なる故より又みな始終邊涯なしかくれ如く如來ハこの法性の理をさとり玉ふ故より始終なき佛體也故にいつを始ともなく衆生の宿善を法爾と發起して衆生に回向し玉ふなり衆生も亦この法性に由て生する者なるゆへよいつを始めともなく生してこの如來の回向ゑ預て淨土より生ぜる也これたゞへは一圓輪相の如しこの圓輪の上に於て何そ其前後始終を求むへきや然るにこの圓輪の上下左右の内いつれなりとも指にてこれを押へてそれを始と定むるときはまた始を云もの無に非さるか如くこれ法性の始終なき中より十劫再成の始めを立て玉ふときはまた其始なきに非す然れとも其十劫の始と云ハ衆生の爲に設け玉ふことなる故にろの一類の機の上にて始と云ことを論する也然るに佛體の方には本來法性の中ゆ

るゆへに又ろの十劫成覺と云も實の始と云ものゑ非すこれなを一圓相の中を押へて始とするハこの方の分別にして立るまてにて圓相の方には實の始めなきか如し故に無始の正覺と云也然はこれ無始と云へゞも其無始の相また實ゑ十劫再成の時に異ならすこれまた一輪相の押ゆる所も押へさる所も只一の輪相にて替らさるか如し故に無始と再成と无二无別ゞ云ふ也例せは昨日も無始の无明今日も元初の一念と云か如し凡夫の无明いつを始とすることなけれハ無始と云ふ也然にその无始の无明の相實に曠劫久遠の昔も今日現在の上もさらに替る事なきか故に昨日も无始の无明と云なり而してこの始めなき无明と云者一切諸惑の根元よりしてこれよりさきにおこる煩惱なきか故にこれを今日も元初の一念と云ふなりこれ

み依れハこの无始や云ひ元初と云ぬ言ハ互顯の語也謂くこの无明諸惑の元初とゐりてこれよりさきにおこる始れ煩惱ゐきか故ゑ無始と云也然らハ其根本として始ておこる無明はいつの時にか迷ひそめたるやと云に其始と云ふことゐゑれは又元初の一念を无始の無明と云也而してゐの始の知れぬ無明と云ふもの即昨今の迷情ゑ異ゐらさる故に昨日も無始の无明今日も元初の一念や云也昨日も今日もや云ふもの字のてゐをはにて久遠と今日の時節ゑ不同あることを知せたる也もや云ふ言ハ亦と云字のこゝろを含む也然は昨日も亦無始の无明と云ふことと也亦と云ときは久遠の昔れ無明の如く亦昨日も同しこと也と云ふこゝろ也然ハもといふ言にては二つあるものを並へをきて一つに合するときゑいふこやゐれは久遠と今日と時はかハれとも體は同しと云ふこゝろ也これゑ由れは元初と云も無始と云も唯その法體に付ていぬことゑて時節ゑ約してい ぬに非すと知るへし何とてかくの如く無始も今日も同一にしてはらぬ无明や と云ぬにこれ則ち法性に即して起るものゐる故に法性ゑ始終ゐけきハ無明も亦始終ゐき也始終ゐや と云ふときは常恒不變也故に無始も今日も其相常恒ゐる故に同一や云ふ也今如來再成正覺の義もすゐはちこれゑ同しろの十劫成覺の相そのまゝ无始本有の成佛の相也是猶昨日も無始の无明や云ふか如し而してその十劫始成の所法性に即して顯れ玉ふゐれハ常體一切佛法の根本やしてこれ成覺の外にゐの元初とゐる法ゐき本誓ゑしてこの本誓久成と十劫と異ゐらさる故にこれ猶今日も元初の一念と云か如しこ

の道理に由れは畢竟無始再成同一不二也然よとれ不二也とてまた實に久成と再成とおきに非す是猶昨今の無明の一念曠劫流轉の相と同しと云か如し爾はこの再成の上に若その無始久成の別なくハ何そいまよ十劫とゝきたれと塵點久遠劫より等との玉ハんや然はこれその久成と再成とよあれとも即ち一法性の中なる故にまたハつれを久成再成と分別すへきやうなしこれ猶一輪相代始終なけれとも指よて押ふる所始とおるか如くこれ始とおれともその前後左右みな唯一の圓相なれは實の始めなきか如しこれらの道理始めなきか故に無始と云ひ本よりある理なる故よ本有と云ひ法としてしかるゆへよ法爾と云ふ也この旨をよく會得せハこの如來無始より宿善を回向し玉ふよ由て衆生もまた無始より往益を成すと云こと

何そ怪しむへきや又復この如來の自證の具德よ約せハ無始より本有として一切の衆生を悉く成佛させ玉へりこれよ由て如來の方にハ無始より六道十界法爾として恒沙の眷屬聖衆としてをはします也衆生の方にはその如來の成佛させ玉ふ宿善あるに由て終には此大信を發起して已今當に往生成佛する也この道理を他宗圓實の談にハ一切衆生舊來成佛と云也然にたゝこの有情數のみに限らす器界森羅悉く如來の性德也故に非情も成佛と云也これ時ハ善惡一切代諸法諸法宛然やしてその相を泯せすみなこの如來の體德なりこれをまた他宗には性具性起六大周徧の法門等と云也然に淨土の一門とりは全く如來の性德といふことと也これさきに喩る陰陽の性理万物に徧滿して一物やしてその性を離るゝことなきか如しといふ

ハこれ也かくの如く諸有万物彌陀性具の物體なる故よ本有よ眷屬無量よして淨土を莊嚴し玉ふと知るへし

問　始終なき法性より理より立て一切衆生を無始とり一時に成佛させたまぬるならは諸佛もまたこの如來と同時の正覺なるへし然は諸佛に一二の次第を論すへからす然にさきよこの如來を第一の佛といぬときハ無始の法性より起といふ道理よそむきまる一切の衆生を無始とり一時よ成佛させたまふといふ義に相違すへからさるや

然は何そ其第一佛と云ふ名義を許すへきや

答　汝ハ法性を以て一泥丸の如く思へるや法性は然らす即こを一切諸法の體生なる故によく一切を生す故にこの法性の上にまた法爾なして前後始終一二等の差別あるなりこを無住の本に從て一切の法を建立すなを說玉ふなり然よこの差別あれとも即其差別同一法性の故に前後始終一二の別なしこれ一圓輪相の喩を以て知るへし然にその法性をハ即この如來の體德なるか故に或は分身して第二第三の佛を出生し又た衆生もこの如來の法性の回向に由て成佛するとき第二第三の佛といはるゝ也但しこの第二第三と云は一機一緣の衆生を濟化する上にて論する也故にこれこの衆生の前にハ第二の佛となると云も他よ衆生の上にハ或は第一佛又ハ第三佛ともなるも有るへしこれに由れハその第一二三四等の名はあるとも實の一二の佛なし然ハその一二等の名は必す確乎としてあるに非れとも諸佛出生の根本はこの如來の法性なる故にこれを以て第一佛と云ふ也この如來よ法性なくは何れの佛いかなる理よ由て出生

あるへきや故に顯名抄にの玉はく涅槃經まい阿耨達池出四大河如來亦爾出一切壽一切人天壽命大河流入如來壽命大海といへりしかるは阿彌陀如來は久遠實成の覺體無始本有の極理なり迷悟染淨一切の万法ことく〳〵く阿彌陀の三字に攝在せすやいふとなし乃至六道生死無常の壽命を攝してみな一實眞如本有无量壽の佛智に流入せしむへしやと知るへき也諸佛のなかにひとり無量壽佛と號す壽命は一切の根元なれは諸佛も彌陀の智慧より流出し衆生もまたかの壽命より出て〻還てみな如來の壽命に流入すへき也乃至されハ眞言教まは无量壽佛をもて大日法身の常住の壽命と談す法身の壽命ならは一切の壽命はこれより出ると疑ぬへからすと此妙釋まに準せハ一切の衆生を本有一時に成佛させ玉ふとも又その始終なき法性を證し玉ふ處なりともいつれみても其一切の根本となり玉ふ道理を以てこれ次第一佛と名くる也これなを始終なき無始の无明を元初の一念と名くるなを如し本と始終なき物體を何ゝ元初と云ふなれはこの無明諸惑の根本としてこれよりさきにはこるへき煩惱なきか故に元初やいふ也かくの如く諸佛はこの如來の三昧より成し玉ふ故にこの如來とりさきなる佛なるきを以て此如來を第一佛や名くることとその理何そ誣ぬへけんや

問　本有の彌陀の回向に由て衆生无始よゝ本來成佛するならは何そ煩しく今ま如來を賴て淨土に生せゝと勸むるや又若實に本來成佛ならは現に今日に我等この惡世まに在て諸苦の堪かたきをいかんこれに由れハ無始本來成佛の義甚る信しかたし

答　衆生本來成佛と云ハ佛ゝ知見に在ることゝ也故ゝ一人發眞還源十方虛空一時消殞すと説れて阿彌陀如來ハ無始本有に發眞して源に住し玉ふ佛なる故にその知見とりハ十方法界の情非情ともに本來成佛ゝ非さることなしと見玉ぬなり此知見ある故ゝ衆生をして其本來成佛と云ふ所を悟らしめんとおほしめして无始本有より悟りの如來ゝ功德を衆生ゝ回向し來り玉ふ也然は何に由て本來佛にてある衆生の迷に在るゝといふゝこれ法爾の道理なゝ衆生と云ふ者に在てハ無始本有より諸惑を具足する故に如來ゝ頼みて信を發すと云ぬことなけれは悟の佛とあらハるゝ期なしこれ如來は無始より本有に成佛しましますゝ故に衆生も佛とみ玉ふ知見ある也然ゝ衆生と云もゝハこれまた無始とり本有と无明の諸惑に迷ぬてゐる者なる故に本來佛と云ふ事を知らぬなりこれ佛と云ひ衆生と云ふ法爾の差別なりこれたとへは熟睡する人の夢ゝ怖ろしきことを見て甚た苦しむを更に夢とは知すして何とそ其患難を遁れんとて百計すれともろの夢ゝいまた覺ぬうちはその苦を除こと能ハすこれに由てその畏れ叫ふ聲外に徹するとき傍に初めより覺てある人有てこれを聞てこれ夢に魘るゝなりと知て手を以て彼の睡る人ゝ搖り聲を揚てこれゝ喚ふに忽ち夢さむるときはその夢の中ゝ見し諸有怖ろしき事は曾て一もなしそのときにさては今まて怖ろしく苦しかりしは皆夢にしてまことなることよてハ無かりし物をことの外ゝ術なくありしことのおかしきことと也と思ふ也然にこれ覺めたれはこそおのしきことゝ思へと夢中に在りては實に怖ろしかりし

事は限りなきなりこれよ由れは同し一間にある人なれとも覺てゐる者の上にハ初めよりその夢中に見る處の怖しきことハ一もなし唯睡りたる者の心の上にばかりあるといふもまたこれ法爾の道理なるか如しなくの如く同一法性の牀の上に在れとも無始より无明の睡を催して衆生をなる者の上にハ六道四生の怖ろしき夢を現して種々に苦惱してこれ如來の安靜とさめておはします法性の座席なりと云ことを知らぬ也この故よこの无明の睡のさめぬうちはいけまても迷の夢ありてこれを實と認めて或ハ喜ひ或ハ憂ふることを也然に初めよりさやりて在す佛ハ九界六道本來佛の性德よして一相平等なるものにして實に苦惱はなし故に迷の衆生を云も只うの无明の實なき睡に侵さるゝまてよして同し法性の座席に安靜とし

てゐることなりと見玉ふ也これ無始本有に佛界と云ひ衆生界と云差別の法爾をしてそなはる道理也而るよこれ夢なりとてこれを喚ひさまさすはその夢みる人の苦患は止むへからす故にさめてある人の上よりハまことの苦の物體在るにハ非すと知りなから夢こる術なさを止むへしとてこれを喚ひ起してその夢の苦を脫れしむる也これに由てそれ夢をさゆしてこれは初より安靜なる座席よて夢の中よ見し或は火にても水にても怨賊にても惡獸にてもその場にハ本より曾て一物もなしと知るときは今までその跡形もなきことに多少の逼惱を苦むことそれあさましさよと反つて大にこれを笑ふ也如來の衆生を濟化し玉ぬと云ふもこれに同し果上の佛知見にハ六道四生本來法性と見玉へハその實苦の境界はなしと知ろしめせ

ともその妄情を悟らせすしてはろの迷苦の止むと云事なきの故に
ろの无明の睡を寤めさせんとてこれか爲に無始より永劫の修行を
起して衆生を招喚して警覺させ玉ふ也故にこの佛の招喚に由て無
明の睡りさ免畢るとき唯今までの迷の境界を夢の如しとさとると
と也然るときハ佛の大悲招喚の御利益に非すハ衆生の迷の睡ハさ
むると云時節ハなかるへし故ニ衆生の睡をさますと云は本これ如
來他力回向の大悲によるを云こと也然はかくの如く無始本有ニ同
一法性の上ニ法爾として迷悟の品と云ふものあるか故ニ佛ハ修行
して衆生を救ひ玉ひ衆生ハ佛を頼て迷を轉ずる也然ニこの法爾と
して本有に迷悟の品ある故に佛を頼て迷を轉すと云義を知らぬも
ハ彌陀ハ十劫已前ニ衆生往生せすは正覺さらしと誓ひ玉ひて既
ニ正覺なり玉へハ我等ハ十劫の昔に往生成佛せりこの道理を知ぬ
故ニいまゝて迷ひ來れりこれを知るときは何を迷ニとゝまるへき
これニ由れは今こゝさらに佛を頼むと云義ニも及ハぬ也を云ふ大
僻見を以て自も損し他を損する族古へより十劫非事ハ邪義とてあ
るなりこの邪說本とハ西山義の徒弟の中より云ひ初むるにやかの
派の抄物のはしニ書のこゝろ粗見ゆることありこれより相ひ傳ゆ
るにや今家の末弟の中盛ニこれ義を勸て現罰を蒙むる類ひあり元
來これ愚昧の才覺より佛教の大體ハ道理をも極めずして珍らしき
こと〻人に思はせてそ身に德付くへきことを計るより言ひ出すこ
となるへし然にその邪說を聞てけニもを信ずるほとの者はなた其
邪說を思案し出す人よりハ愚痴なる者なれはさら〳〵佛法の正義

必知るへきことなきハ至極せる義也十劫の昔衆生往生の義成就して正覺なり玉ふと云はたれむ者ハ必す往生させ玉ふと云ふ道理成就し玉ふを以て正覺なり玉ふことも也然をたのまされともそのこゝはりを知れは早や往生したる身なりと云ハさてハ本願に三信せしと誓ひ玉へるは無益の事なりをせんやこれ本來迷悟の差別と云こと無始より定りあるものなる故に迷の衆生となる方には佛をたのますして往生成佛すると云義ハなきこと也然を頼まされとも十劫已前ま佛になし玉ハる上ハ何そこれを疑へきやといはゝ十劫の事はこれ甚た近きこと也衆生の佛になりてゐると云は無始本有に舊來成佛と云ふなりそれときは十劫の正覺成し玉ハぬさきより何ろ修證を論することあらんや然るにその舊來成佛と云ハ佛の知見の事にして衆生に妄見の上にハ舊來無明なりこれに由れハ十劫已前に衆生往生すと云は如來の正覺の上に成就の德を玉ふなり衆生の方にはろの一念の眞信發らさる内ハ十劫已來そのまゝ迷妄の衆生也然に唯其本來成佛と云道理を知れハ修證に及ふへからすと云はこれ斷滅の見となる也いはくこれその修證の事なしと滅無するか故に修證まよらすして成佛すと云ハまたこれ常見をなる也いハくこれ修證せすして本來の佛と執するか故にこれらハ畢竟法爾として迷悟の道理あると云事を知らぬゆへなをこれに依れハ今この本來成佛と云こともしくその道理をこゝろへとけすハかの十劫非事の如くになりて唯同一法性を云ことハかりを迷執するやうなるへし若夫法性の一理のみにて迷悟染淨の道理法爾として本有なる

きこゝるらハ十界三千の法門も事々無碍法界の圓談も徒設ゝなるへし然は法性の上よは歴々ゝとして迷悟の差別あるか故にろゝ迷の方よてハ六道四生ゝる實の苦惱あり悟の方には六道四生舊來成佛とゝるるかりこの義を賢首大師解して曰く一切衆生舊來成佛るらハ何ゆ今現よ迷の衆生ありやと云はゝこれ人天教の分齊を以て佛境を疑ふるり衆生本來成佛とハ圓佛の知見るり二乘の分位にも至らすして何ぞ舊來成佛の談を知らんやとまことよろれ佛と衆生と舊來同一法性るれゝもその性の中に自然に迷悟ゝ別本有に分るゝゆへにこの故よそゝ轉迷開悟の佛の教法をこるこゝを也若この差別るく混沌ゝして只一ゝ法性の理のみおらハ頑虛空の如くるるへしかゝくの如く無差別の法性を平等の理と云ハゝこれ惡平等るり故に知

るへし迷悟染淨の差別本有に歴然として而も同一法性の内を出すと所謂る法性ゝハ卽この如來所證の體德るり故よ衆生もかの體德の邊よ約せハ本來成佛るりこの體德の中よ法爾と迷悟の別あるゆへに衆生は迷苦に沈み如來ハ悲願を發して濟化し玉ゐ事るり

問　本來夢ゝ如るる六道四生の苦也とさとり玉ふ如來るらはるゝひ因地に下りて修行の勤苦をるし玉ふもその苦するはち夢の如と知り玉はゝ何ぞ如來因位の苦行實事よある〳〵きや實事に非すは衆生の實苦ゝ思ふよ同しかるへからすや

答　夢を見て苦む者を覺めたる人の見るよその夢の如くるる苦はるけれゝもかの夢を苦む體を見ては快しゝはせす定ゝてろの夢の苦しかるへしと思やるより何とそはやくさまさせたしゝ思ふてこ

れを揺起し又は喚ひ起すにいたく睡り入て覺る心のつかぬものにはことにその力を策まし聲を勵してこれをさましむるときハ其夢みる人の苦む苦には非れとも覺る人の心にも何とそ早く心つけかしとあせりおもふ心ハ苦ハあるなり然れはこれ夢をみすさめてある人なりとて彼の夢こて苦しむ人を見るハともに苦き心なかるへきやかくの如く衆生の苦は實事に非すと知り玉へともその實事に非るを苦む心を又苦こ玉ふ如來なる故にこれかためにこれかために因地の手を揺し修行の聲を勵ましてこれをさまさんとし玉ふなれハ衆生ハ妄苦ハ如に非されとも彼れか爲めの因地の修行なれは大悲の苦ハあるへきこと何ぞ疑ふへきや

問　凡夫ぞ云へぞもこの法性の中の妄苦は本來夢ハ如くなりと知らはこれ則妄苦の道理をさとること云ものなれハ夢ハ苦を夢こと知りたるときは苦むへきやうなきか如くたぞひ妄境ハ中に在りとも苦しぞ思ふへからす然に我か輩のこれハ道理を知れともいまた苦境を轉せさるは何なる義そや

答　これ世間の睡中にもぬぞこれは夢なりと心のつくこと云あり然れぞも其眠りいまたさめさるときハ夢とハ思ひなから正しく覺てあるときの働はならす何こそ覺めたきこと哉と思へこさめらきこときは夢とはおほへなから苦むことあり今もまた是に同し一往妄境は夢の如しと知るハ解悟の分齊こ云ことなりされともいまた无明の睡のさめぬ中は悟ぞの働きハなりかなし正しく无明の睡のさめ盡す處を證悟こ云也然るに頓悟の法門を談する人の中に纔に夢

と知る解悟の處をはや證悟に大覺を得たるやうに思て因果を撥無し邪見に墮るあり哀れなることゝ也これハ夢の中ゝ夢をみてその夢をまゝ人ゝかたると云ふ夢をみるか如しこれを略論には夢中與他解夢雖日解夢非是不夢とまこゝゝ小忠は大忠の害小悟は大悟の妨けゝてかやうゝなるまさとりなるもれは夢に夢をかさねてその夢を知ぬはこれ无明の睡のことに深かゆへなりその大夢とり云ふことなるゝはこれ大きなる寢語ゝ云もの也

問　初めとり覺る人の傍とり喚ひ起すに由て夢の苦をさますを彌陀の招喚にて無明の睡を寤すゝ喻られは若し傍に人もなくて自からふと夢れさむるはこれ自力にてさとると云ふに喻ふへし然らは強ちに一切の機類みな如來招喚の回向に由てさとるゝ云とは許

すへからす

答　それ喻ゝ云ふゝは分喻全喻と云ことあり佛法の深理ハ實ゝ言辭譬喻の筌蹄の及ふ所に非されゝゝ一往ゝの事の相似たるを以て喻ることゝ也然はこの夢の喻も一分如來の招喚ゝ非れは實に無明の睡さむることゝ能ハすと云ふに喻るまて也然を強て自らさむる者のあるを自力の悟解ゝ比すへしとは義を鑿すと云ふもの也然れとも

この不審また旨おきゝ非されは今これを會すへしまつ其獨ゝ夢をさますと云ふは何なる心にてさむるやこれ夢の妄心にてさむるや又日比れ本心にてさむるや夢の心ゝてはさむへからす日比れ本心おこりて正念つきてさむるもの也ゝの正念と云は初とり覺てゐる人の本心も夢をこてひゝりさむる本心も人間の本心と云ふものに

は替りあるへからす然は傍より喚さますも自らさむるもそもに本心ハ同しこそ也ゐくの如く自らさとると云ふも佛ハ言教を聞かすハさそる道理あるへからすたとひ教外別傳の宗にして文字を立てすと云ふとも根本世尊の出世たゝ玉ひて佛法と云言説を演玉ふを聞とりおこることなれハ言語ハ相をからすハ何を以てか單傳直指といふことをも思ひよるへきや然は一切自力ハ法門と云ふも本と佛の言教を以ておこるそ云こと明かなり然ハ其ハ言教と云は即ちさきよいふ如來の異の方便より諸佛の教道説顯し玉もの也然は自力にてさそるやうに思へともろの言教即此如來の方便の法なれは本とこれ如來の回施に非すしては悟りに入るこそなしと云はこの道理也これなを自ら夢のさむるゑ傍なる人の喚てさますも夢をさ

ますハ人ハ本心よりさむるか如く他力にてさとるゑ自力にてさとるもさとる所以をみなこの如來ハ本心よりさとらせ玉ふなれハ如來ハ回施に非ることなし但し自力にてさとるも本そハ如來の回施なりを云へとゑすてに自力ハ修行にてさそると云ものなきに非すハ何ろさきに自力のさとりハ一人もなき也といふやといハゝろの自力にてさとるといふことを示して見を玉ふは即ちこれ無始とりの如來の回向ゑてすてにさとり玉へる大權の聖者のなりに凡夫と現してひとり夢のさめたる體をしてみせたまふ者也これ實業の凡夫の眞に本願他力に緣のとをき者を弄引して終に本願に歸入せしめんとし玉ふ方便なり然ハ實業の凡夫の身にてハひとり夢をさますことならぬものゝ如しと知るへし

問　一切に衆生は無始より本有なるものなれは今日の我人も無始よりこれあり然に無始にむかしに早くさとりて大權となる人もあり今日に至てなをこのくの如く迷の凡夫となりてゐる在りこれまた无始より无明に淺深不同なる處の法爾に道理なりと云ハゝ其法爾の中よハ本有に菩薩種性乃至闡提種性と云ふ差別あるへしこれ法爾に十界の相あるか如し然らは無性の者は永不成佛と云ふ法相宗の所談理實よ究竟に義ゑ非さるへきや若然すハ何ろ法爾ゑ無明の淺深あるよ由て悟りに遲速ありと云や

答　無始ゟ十界の差別ありとハこれ諸法の相也諸法に性は唯一佛乘の外に更に餘なし其の差別の相となること無始法爾の道理なれとも體性は卽是一佛性なる故に如來これをしてろの本源よ還らしめん爲に多少の困苦をなして誘引し玉ぬなりこゝを以て九界の有情終よは佛乘よ還らさるなし若夫確乎として五性の體あらハ諸佛之を誘引し玉ふとも其の中人天二乘及ひ無性の類は成佛に へからす實に成佛せぬ者ならは諸佛の教道と云も有名無實の事なるハし故に相宗の所談は究竟の說に非す此旨は台嚴兩宗に廣く辯することなり討て知るへし自家の所要に非されハ措て詳よせすこれに準て知るへし無明の淺深と云もみな法爾に相なり相にハ其の不同ある故よ成佛に遲速あるなり

問　無明の相に不同ある故に成佛よ遲速あらハその極遲の者は盡未來際成佛の期なかるへし然はこれを無性の者と云はんも何ろそに理なしとせんや

答　衆生無邊誓願度の諸佛の大願虛妄よ非れハ一衆生として終には成佛させ玉はすと云ことなし然は何そ盡未來際成佛の期なしと云ものあらんや既にこれ成佛せハ無性と云者何の所よかあらん

問　實にかくの如く未來際を盡して一衆生として成佛せすと云こそなきからは終よハ衆生界みな盡て只佛界ゝ一となるへきや若然らは其の時の諸佛は度すへき衆生なけれは兀然ゝ空く坐して在すへきや又かくの如くならは九界の相と云こともなくれは三千の法門と云ふ義も壞れ事々无碍の圓理も徒ら事となるへし然らハこれらの圓談そ云ぬも衆生界のある中はかりのことにて終には滅無なる法門にてあるへき耶

答　これは古來とり性相二宗に亘りて爭ひある法門也かやうの沙汰はうの性相の教義を學て知るへき事なり本とり今家にはかやうの義を論談するは機の計ひになるとて嫌はせ玉ふことなれとも來難遁れかたけれハ今姑らく其の大梗を辨せん先ゝそれ一切衆生界と云ものハ總て無始本有に本來增減なき者也そ知るへし但しこの增減なきと云ふ義よ付て大小權實の宗よ由てうの沙汰同しからさる也うゝ中小乘よては衆生と云ものは一聚ゝ五蘊ゝ法なれハ此五蘊三世實有法體恒有の故よ无量の諸佛出世して一々よ無數の有情を度し玉へとも更に窮め盡るこゝなしといふ也權大乘にては一切衆生は唯識の所現なる故に姑く俗諦の相ゝ上よては一分菩薩性不定性は成佛し無性ハ成佛せすと云ふ增減はあれとも眞諦識性の上にハ本來唯識の物なれは增減なしと云ふ也實大乘の意ハ一切衆生

はこれ如來藏ゝ緣起なれハ衆生の全體如來藏性なる故ゝ衆生即ち法身法性なり法性は法界ゝ徧滿して增減なき者なれは衆生界も亦增減なしこれを喩ふるゝ虛空界の如しなゝへハ一の鳥の虛空を飛ふこと西より東に向て百千年を經て飛ひ行かんに東は近くなりて西は遠くなるといふこと有るへからすその故ハ虛空にいかほどを東の端とし西の終とすへきことなきか故に百千年を經て飛行とも實ゝ虛空を飛盡すと云ことはなき也然れとも其鳥の飛行ゝとのあとにハ千里萬里と云ふ虛空ハあるなりかくの如くその空ゝ里數ハあれとも虛空の盡る處と云ことハなきか如し諸佛の衆生を度し玉ふもこれに同し無量の佛出世して無量の衆生を度し玉へとも衆生界の盡ると云時節はなき也これ虛空の邊涯なきか如し然ゝとも實ゝ成佛する衆生なきに非ゝこれ鳥ゝ飛行虛空のあゝゝは千里行ハ千里の空あり万里行は万里の空あるか如しかくの如く虛空にその飛行あとはあれとも實にその空の盡ると云ことなきに同くして衆生は無量に成佛すれとも終に盡ると云ことはなき也これを略論には其實非度非不度非盡非不盡との玉へり又これを淺きたとへにて示さは閑庭に生する艸の如しこれを掃除するとき其艸を一ゝに拔き捨れはゝの根とともに引き捨るなれは重て艸の生すへきやうはなき道理なり若ゝれ根ありて生すへくは初よりゝの根の有る程は生すへし然ゝその生するほとを一ものこさす拔き捨るなれは艸の根を絶することなるゝ又日を歷れハ始の如くゝ生ひ出るなり然は大地にゝは艸の根のたゆると云ことなくして而かも前後ゝ生する者ゝ

みへたる衆生の盡きざるもこれよ準して知るへし故に五の不思議の中に衆生多少力不可思議と示さるゝはこのゆへなり

問　衆生界の如きハまことにこれ法性の故に法界に徧滿し奇幾千の衆生成佛すともあとより段々に出生するなれハ實ゑ增減なしと云ふ道理は然るへし然に佛界の如きハ返流することなゝれハその減すると云ことはなき道理なりさあらは一人成佛せハ一佛增し千人成佛せハ千佛增すへし然ハ何ぞ佛界に增減なしと云んやかくて如く一佛つゝ增すれとも それとも に增減なしと云ハゝ前佛は次第に灰滅ゑ歸すと云へきや若然らは成佛と云も畢竟してハ空无になるものなるへしや然りといハゝ世儒の天理ゑ歸ると云ぬに同しかるましや

答　成佛と云ことハこの同一法性法身の道理をさとるを云也此法身をさとれハ十方三世の諸佛同一法性身にして無二無別なり唯諸佛と云ふのみゑ非す九界の有情及ひ非情も亦復同一なれはさきに迷ひ衆生と思ふものも元來佛けなり故に一切本來みな佛なれハ何に對してゝの增減と云ふものを論せんやこれなを虛空の鳥の飛行といまた飛ハさる處ゝ不同あれとも虛空の相は一同なるか如しかくの如く成佛して法身の道理をさとれは法界みな法身なる故に成佛の身も成佛せぬ物も全く同一とみるなれは衆生界佛界混融不二なる故ゑ始めより只一つに法身なれはその中に增減ゝ云ことはなしゝ知る也これ古人の詩に到得還來無別事廬山煙雨浙江潮と云ふこゝろの如しこの道理を以て諸佛衆生ゝ度し玉へゝも實には度す

ることなしと云ふなりこれを論註には度無所度とその玉ふ也又略論には喩ての玉はく夢さむれは夢なしと云ふ人おし夢みると云人なくれはよひさますと云ふ人もおしすてゝ悟りて佛になれハ迷の世間ありとこることなし迷の世間をみる人なくれハさとらすると云ふ佛もなし然はさとり畢れハ本より迷と云ふものは虛妄な物にして實體なしと知るゆへゝ實には度すると云とも遊戯の如しと若然らは諸佛本來衆生を度せすと云はんも其理あるへし故に諸法無行經よの玉はく佛不得佛道亦不度衆生凡夫強分別作佛度衆生然に迷の衆生は實に苦を厭ひ樂を求め縛を畏れ解を求む故に度すと云ふときハ佛に歸命す若し實に度せすと云ふときは佛ハ大慈大悲に非らすと謂つて歸向せを歸向せされハ長へゝ寢て大夢止むへからすこの故に迷の前にハ度すと云て度せすといはすと示し玉へりこの巒公は解義をまたよく心得へし度せはとの玉ふは實ゝ度し畢て玉ぬ故ゝ度せられてハ法身をさとるゆへに本來の佛と知るなり本來の佛なりと知るなれは何そ度せられて始めて佛になるものと思ハんや然らは本來能度も所度もなしと知る也能度所度なしと知るときハ本來の佛なる故にいかほと成佛の數多くなりても本來の物なれは是に何の增減を論すべきやと云と也然に一人成佛せは一佛增はへしをハ是其佛の相貌を以て其多少を數へて疑ふとなり是甚た佛法の道理よ暗き妄難なり佛の境界は不可思議なる物なれは一花百億國一國一釋迦とも說れて釋尊の分身百億に現し玉ひて各々に本佛の功能を顯し玉ふか如し是に由れハ百億の佛在せをも自

體は只一佛の釋迦尊なり一佛なれとも又實に百億體なり此道理を以てこれハ佛體なは實の數をいかほとゝ定むへゝんや然るときは無數無邊の佛ありとも其の自體ハ只一の法身なり同一の法身なれハ何そ分別の上の數量を極めんやこゝに由ハ百千の衆生の成佛すれとも皆同一法身になるか故ゝ自他の差別なし然ゝと云て世儒の云ふる如き天理に歸して都無なると云ふ者に非す十界三千ハ諸法かくの如く宛然歴然ゝとして當體その相を泯せすみな法身なるゆへに常住坦然ゝとして神通化用方便無方不生不滅不可思議也此不可思議なる處即同一法身也其一法身とは即此本有の阿彌陀如來なり故に三世十方の諸佛もこの自内證より出てゝゝなるその内證智をさとり玉ふなれハ諸有る諸佛の結歸し玉ふ源頭はこの如來を除て更に他なし故に覺公のの玉ふ諸佛も弥陀の智慧より流出すゝこれに依て巒師は實相身ゝの玉ぬるなり實相とは即ち是法身法性の義にして一切万物の實體なり万物の實體なれハこれ諸物の所依所證とし玉ふと明也故に祖師の曰く一如寶海より形を顯して法藏菩薩とおのり玉ひて无碍の誓をおこし玉ぬ成種ゝして阿弥陀佛となり玉ぬ乃至此如來十方微塵世界にゝち〳〵玉へるか故ゝ无邊光佛と申す然は世親菩薩は盡十方無碍光如來と名付たてまつりたまへりとこの道理ゝ由て十方河沙の諸佛もゝもにこの如來を讃嘆して淨土に往生を勸め玉ふ也然れハこれ實相身なるを以て法界に周徧し玉ふ體なれは一切衆生の心内に入みち玉ふ故に無始より衆生ゝ宿善を回向し玉ふ也これに由て衆生大信を發起して淨土を願ふ機となる也故

に祖師の曰く无碍光佛は心中よりおさめとり玉ふ故に金剛の信心とかゝる也と覺公の曰く衆生もかの壽命より出て〻還りてみる如來の壽命に流入すへき也と此の如く化他の大悲を施玉ふ處を鸞師ハ又爲物身との玉ふ也然ハ實相を全して即ち爲物の身なれは實相と爲物と異に非す一に非す實相とは法性法身佛の自受用也爲物ハ方便法身佛の他受用なり此二身一異に非れは自他二受同一にして差別を論ぜへらす故に不可思議光佛と名付たてまつる也故よ祖師の曰く此如來すなはち誓願の業因に酬ひ玉ひて報身如來と申ぜ勢すなハち法性法身ゑ同くして无明の暗をはらふゝこれにより法身の光輪との玉ふは法報不二の光明と知るへしかくの如く此佛德より發さしめ玉ふ行者の信心なる故よこれを如來の回向と云ひ此佛德とり自然に行者の善の三業をおさしめ玉へはこれを如來の行を行ぜと云ひ此佛德常に行者を離れ玉ハねは行者の居る處即ち佛と共に在る故に平生とり此佛護を蒙れハ臨終よ始て佛迎を期すへきに非るを以てこれを不來迎と云ひ此佛德の中よ諸佛ゑ萬德悉く具足し玉ふなれハ別ゑ餘佛菩薩を念するにも及はゝ餘善餘行を修すへきよ及はぬゆへよ雜修雜行をなすへき道理なしゝ今家に沙汰するはこのいはれ也若しくこの道理を察せハ即これ此如來の本有の自內證に叶ふ故に直にかの佛の自證究竟の眞土に生すゝ云ふと也これを吾祖己證の法門今家不共の妙談とす深く思ひ詳よ察して今家の妙釋を仰信すへきなり上來は來難に由て姑くこれを答釋す故に本有の義に就て論す然れとも大悲純極の佛德は化他利生を本と

し玉ふなれハ久成を動せずして十劫再成の方便ゑなし玉ふこと也
然ハ今の我等は十劫再成の一類有縁の身なれは強てその源頭を尋
ねずとも只今日再成の佛恩を偏に喜ひ奉るへき也ろの再成の當體
理實にハ久成と全く異ならす故に本迹ことなりといへとも不思議
は一なりとあるの道理これらの謂也と知るへし

此書享保四巳亥霜月二十二日　祖師の御祥忌をつとめたてまつ
る砌ふと思ひよることありて筆を起して同臘月十九夜稿を成し
畢りぬ本より愚案無才に身に更に近來病に侵されて章疏を伺ひ
みるともなけれハいよ〳〵佛教に道理ゑ廢忘するなれはその誤
りの多からんことを慚ち痛むこと也且つハ法の源頭の微妙不可
思議なる處を計りたてまつるといふこと　佛祖の御冥見も甚た
恐るへきこと也且はこれ機の計ひにおると云ふも似るへきこ
ともあらんなれはかへす〳〵あさましきことをなり併なから聊
か自信增長の良縁にもやと思ひぬる志ゑよりところとする耳

笛阜埜逸月筌四十九齡謹書

源頭論卷之下終

明治廿三年六月廿五日印刷
明治廿三年六月廿六日出版

（定價金廿五錢）

著作者相續人　楠　覺　證
山口縣平民　大阪市北區河內町壹丁目十番屋敷

發行兼印刷者　宮川臣吉
周防國山口町大字中市町第六番屋敷

印刷所　協同印刷會社
周防國山口町大字道場門前町第六十二番屋敷

特18
932

源頭論

国立国会図書館

017754-000-2

特18-932

源頭論

月筌/著

M23. 6

ABF-0670